昭和46年３月28日発行通巻３号(毎日曜日発行)　昭和46年２月５日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

3/28
220円

3

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

刊行のことば

1970年代の世界は，科学技術の異常な進歩と豊かな経済発展をとげた半面，人間の幸福とは何かを，あらためて問い直すことを余儀なくされています。この地球上の自然は，現代文明の生んだ公害のために破壊されようとし，動植物はかれらの生息する環境を失いつつあります。動物の一員である人類の運命もまた，この自然環境の崩壊に左右されるでしょう。

この時にあたって，失われようとしている自然と，危機に臨んでいる動物界を，いま一度ふりかえって，認識を新たにすることは，人類にとって無限の意義をもつものと信じます。

生きている動物界の実態を明らかにし，自然への親しみを呼びおこすことは，また人類の未来についての教訓ともなりましょう。

朝日新聞社が，フランスのラルース社と提携して「朝日＝ラルース　世界動物百科」を発刊するのは何よりもこのためであります。

本誌は現在この地球上に生きている動物の生態を，全世界から選んだもっとも美しいカラー写真でとらえながら，動物のなかでいちばん人間と縁の近い哺乳（ほにゅう）類，それも人間の〝親類〟であるサルからはじめ，鳥類，爬虫（はちゅう）類，両生類，魚類，昆虫（こんちゅう）を含む無脊椎（むせきつい）動物の順で紹介していきます。

内容は，高い学問的水準を保ちながら，青少年にも親しめる平易な表現で，生きた動物の姿を興味深く伝えることにつとめました。

とくに日本の読者のためには『私たちの仲間』のページを添えて〝動物週刊誌〟としての内容の充実をはかり，世界と日本の動物界のニュースや話題をおさめました。また日本の第一線動物学者の手により，カラーページを補完する解説と注をつけ，あるいは日本の動物についてのより詳細な紹介を行ないました。

本誌はアイウエオ順に並べるこれまでの〝引く百科〟の観念を大きく打破しました。192 週にわたって楽しく読み進んでいくうちに，おのずから動物についての百科的知識が集積されていく〝読む百科〟として，いつまでも読者の皆さんに親しまれることを期待してやみません。

世界動物百科　第 3 号　3月28日

目次

カラーページ

霊長目真猿亜目　7
真猿亜目　8
狭鼻猿類　14
類人猿上科　14
オランウータン科　14
ゴリラ　14

表紙　PH.　Z. F. A.
表3　**ギャラリー　埴　輪**　水尾比呂志

私たちの仲間

トピックス　3
動物バカの50年　4
ヒグマと２人のイノシシ　2　美わしき霧多布へ　畑　正憲　5
もうひとつの世界　グループ・5プラス1
随筆　アニイが来るまで　江藤　淳　6
解説・注　霊長類とその研究について　伊谷純一郎　27
ジャングルに ゴリラを追って　28
動物パズル
漢字のふるさと　1　藤堂明保　29
動物写真のポイント　3　田中光常
ペット相談室・裏表紙説明・仲間のひろば　30

監修　伊谷純一郎（京都大学理学部助教授）
翻訳　小椋順子（独協大学講師）

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。

□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。

□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。

□人名，地名は，本人または原地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2—3　〒100 TEL 03—212—0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３—３　〒530 TEL 06—231—0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津　〒802 TEL 093—53—1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１—３—３　〒460 TEL 052—231—8131

次号予告
3月24日発売



世界動物百科
4号　4／4

カラーページ

□チンパンジー
——からだの特徴と生活習慣——
感情表現力——ブロッティの生活誌——みずから選んだ麻酔なしの手術——ピグミーチンパンジー

□オランウータン
——生活——オランウータンの子どもを飼う——マカックとの同居生活——船にのるオランウータン

私たちの仲間

魚の脱皮　広崎芳次
記録された珍魚の生態
威嚇するコモドドラゴン
野生動物こんにちは　2
ヒグマと２人のイノシシ　3　畑　正憲
各隊長たちの紹介
もうひとつの世界　2　G・5プラス1
動物はなぜ〝動物〟になったか
四つの葡萄色の瞳　2　江藤　淳
漢字のふるさと　2　藤堂明保
動物写真のポイント　4　田中光常
動物園のランチタイム
動物たちのメニューとマナー

私たちの仲間

3号………3月28日

トピックス

どちらを保護すべきか

熊本市の江津湖が鳥獣保護区になってから，野生カモが飛来するようになり，保護対策は成功とみられたが，カモによる周辺の農作物への被害も激増している。

江津湖が鳥獣保護区になったのは昭和44年の11月。熊本市の水辺動物園が餌づけした効果もあって，野生カモの数はどんどんふえ，現在はヒドリガモ，コガモ，オオガカモなど11種，約2000羽を数えるほどだ。

なかには春になっても帰らず，定着してしまったカモが100羽もいるが，カモのえさはおもに穀物であるため，周辺の水田を荒らしまわる。

44年には農家からの苦情で，200羽の捕獲を県林務部が許可したが，保護区の鳥を撃ち落とすとは，の意見も出た。さいわい昨年は，地元民の苦情が出なかったものの，今年のカモの数からみて，また相当の被害が見込まれる。

「駆除の申請があれば，許可しないわけにはいかない」という林務部の態度に，「捕獲の慣習がとられれば，野鳥は来なくなってしまう」と地元の愛好家の表情は暗い。■

土佐湾でいないはずの貝発見

従来の学説では，沖縄以南の水深２～５メートルの海にしか生息しないといわれていた珍しい貝が土佐湾で採取された。

この貝はトウカルイ科のマンボウガイで，沖縄ではマンネンガイとも呼ばれているが，イタリアのカメオ細工の素材として有名なものである。

大きさは野球のボールぐらいで，背面部の色は濃いかっ色と乳白色のまだら紋で，腹面部にあたる細長い口の周辺は，赤みがかったオレンジ色をしていてつやがある。

採取者は須崎市の漁業，山崎博文さん（46）で，同市久通下甲崎沖150メートルの海底で，建て網にかかっていたのを見つけたのだが，この貝はからだの３分の２を砂にもぐらせて生息しているので，網にかかるのは非常に珍しいということだ。

また，このときの水深は約50メートルもあり，これまで浅い海にすむとされていた点でも専門家の関心を集めている。

この貝は，さる昭和33年にも土佐清水市の松崎海岸で発見されたが，当時は「ありえないことだ」と学会から無視されてしまった。今回の発見で，高知県の沿岸一帯に生息している可能性は，非常に強くなったといってよいだろう。■

サイの赤ちゃん誕生

西ドイツ，ハノーバーの動物園のサイが赤ちゃんを生んだ。

サイはアフリカにすむ動物のなかでは，ゾウについで大きな動物だが，からだのわりに神経が敏感で，ゴリラと同様，動物園での出産はむずかしいとされている。

西ドイツではこれまでの３度も，そのたびに奇跡の誕生と騒がれたが，４度めの奇跡が起こったわけだ。

赤ちゃんサイの目方は40キロ，シンボルの角はまだはえてないが，鼻の中央にコブがあってその発生を暗示している。

日本では，これまでに神戸動物園で３回誕生している。■



写真　DAD

（写真は，まだ角もはえないサイの赤ちゃん）



写真・オリオンプレス

パンダの〝ラブストーリー〟

〝チチ〟はロンドン動物園のジャイアントパンダである。〝チチ〟の評判はこのごろあまり芳しくない。冷たくて，お高くとまっているというのだ。

それというのも，彼女ははるばるモスクワから，ことしのはじめやってきた求婚者の〝アンアン〟のプロポーズを，２回ともはねかえしたからである。

〝アンアン〟は高いお金をかけて，モスクワ動物園から連れてきたパンダだ。動物園の関係者は，この２頭が友情でかたく結ばれ，近い将来は夫婦の契りをかわすようになることを期待していたのだが，〝アンアン〟の積極的な情熱に対して〝チチ〟はまったく興味を示そうとしなかった。

途方に暮れた動物園の人たちは，２頭が仲良くなるように，ムードづくりやえさにまで，いろいろな努力をはらったが，そのどれもが実を結ばなかった。

〝チチ〟はいまだに処女のままである。「彼女はあまりにも長い間，動物園のおりの中に入れられていたので，自分がいったい『なんだったのか』忘れてしまったのではないか」と動物学者は語っている。彼女自身，自分は他の種類の動物だと考えているのかもしれない。

この自尊心の強いおとめは，無骨なロシアの大グマとの恋を望んでいないかのように見えた。

しかし，ついにキューピットの矢が放たれた。〝チチ〟が恋に陥ったのである。

ところがその恋は，はたから見ても絶望的なものだった。相手が悪すぎたのだ。

彼女が選んだ相手は，東イランから来たアジア産の野生のロバである。〝ベン〟（これがその若者の名まえだ）は，２年前に仲間と死に別れ，最近ただ１頭で〝チチ〟の隣の小屋に引っ越してきた。

ロバとパンダが出会って，おたがいに興味をもち，多少好感をいだくのはさほど珍しいことではない。

しかし，〝チチ〟がこれほど相手に夢中になるとは，だれも考えつかなかった。

〝チチ〟は〝ベン〟を一目見るや，彼女はからだじゅうで愛情の表現をした。立ちあがったり，すわりこんだり，横にころげまわってみたり，その思いをあらゆるボデーランゲージで伝えようとした。

しかし，この２頭の間には，厳然としたかき根がある。これが〝チチ〟の慕情をよけいに募らせたようだったが，〝ベン〟はそんな〝チチ〟を見ると恥ずかしそうにうつむいて，自分の小屋へはいってしまう。東洋の男というのは，慎み深いのであろう。

そして，〝チチ〟は自分の思いが伝わらないと悟ると，この世の終わりといった顔つきですわりこんでしまった。■

（写真は，ロバの〝ベン〟と，かれに思いをよせるパンダの〝チチ〟）

動物バカの50年

「ムクドリのひなが親鳥のそばに近寄ると，父親のほうは知らん顔，母親のほうは足でひなをけるんです。いや，かわいそうで。いくら1か月ぶりでも，自分の子ならわかると思ったんですけど。それでもひなのほうは，自分の仲間がいると思って近づこうとするんです。すると父親が今度はつつく，母親はまたけっとばして，えさを捜しにいく。いや，見ていて涙が出そうになりましてね。あの，石童丸の物語を思いだしました。生みの親にこんな冷たいしうちを受けるとは」

そういって，ほんとうにめがねの奥に涙をにじませる。動物の話となると夢中になってしまうのだ。

村井長正さん。55歳。昭和15年に東京大学文学部支那哲学科を卒業後，東宮傅育官となって皇子傅育掛兼宮附兼侍従となる。昭和33年に宮内庁侍従職参事兼侍従になり，40年に退任するまでの25年間を常陸宮と皇太子の侍従として過ごしてきた。



「まず飼ってみることですね」と語る村井長正さん（川崎の自宅にて）

現在は日本大学教授として中国思想史を教えているが，村井さんにはもう1つの肩書がある。自分でつけた〝動物バカ〟がそれである。

ムクドリのひなもその1例である。昭和37年ごろのことだったが，義宮さまの書斎の前にウメの老木があって，その木に毎年ムクドリのつがいが卵を産みにきた。野生の鳥の飼育に執念を燃やす村井さんにしてみれば，どうしてもこのひなを育ててみたい。そこで殿下にそっとおうかがいをたてた。「1羽いただいてよろしいでしょうか」殿下は村井さんの顔をじっと見つめていられたが，ニッコリ笑うと「1羽じゃからだを暖め合うことができないから全部おもちなさい」

その当時から村井さんの〝動物バカ〟は知れ渡っていたのだ。

巣の中から生後5日めのひなを3羽取りだして家で飼いだしたが，その餌づけがたいへんだ。1時間おきにすり餌をやらなければならない。当時村井さんは週に1回，国学院大学と昭和女子大学に講義にいっていたが，その日もひなをかかえて大学に通った。授業時間は90分だから，ひなの餌づけは30分の遅刻になる。村井さんは，終業の鐘がなると廊下を走って教官室にもどりえさを与えた。たまたま，大相撲の砂かぶりに招待されたことがあった。取組よりすり餌を作ることに熱中して，勝負はあとから隣の人に聞いた。

1か月ほどたって，村井さんは成長したひなをウメの老木のところに連れてきた。

ところが親鳥は，ひなのえさを捜すのに忙しく，村井さんのひなには目もくれない。それどころかつついたり，けったりする始末だ。

「自然というのはきびしいものです」村井さんは，この話をするときになるとどうしても涙が出てしまうと，苦笑する。

心の通う動物家族

村井さんにとってことしが悲しい幕あけだったのは，1月に12年間飼ってきたコサギ（シラサギのうち最小の種類）が死んだことだ。

昭和34年の5月に，殿下たちとの遠乗会が千葉の新浜の御猟場で行なわれた。その帰りに友人のひとりが竹やぶのなかからコサギのひなをつかまえてきてそれをかたわらの松の小枝にのせ「親鳥が捜しにくるだろう」とつぶやいたが，村井さんにはがまんできなかった。一度自分の巣から出たひなを親鳥が連れもどしたりしないことを知っていたし，小枝にひっかかったひなが哀れでならない。「もらうよ」と告げてポケットに入れ，家に連れ帰った。これがコサギを飼う最初だった。

ドジョウとウナギの頭で餌づけが始まったが，10年あまり週に2度，必ず渋谷のデパートの地下でウナギの頭を買うので，すっかり顔なじみになってしまった。

体長60センチほどに成長したコサギは窓をあけておいても決して逃げもせず，それこそ手乗りブンチョウのように村井さんになついていたが，年に1度，3月か4月の交尾の季節になると，イライラして1週間から10日ぐらいの家出をするのが常だった。そうした家出の間のことであるが，当時住んでいた官舎の裏の豊川稲荷の社務所から電話がはいった。奇妙な鳥がいるがあなたのではないかというのだ。村井さんの動物好きは有名で，近所では何かあると，獣医より先に村井さんに相談にくるほどだった。

村井さんがいってみると，コサギは羽をバタつかせながら走り寄ってきて，からだをこすりつけて甘えたという。この話をするときの村井さんは身ぶりをまじえて，実に楽しそうだ。

「鳥ほど感情を豊かに表わす動物はいませんし，こちらの気持がはっきり伝わるものも少ないですね。もっともわたしの飼育法には1つ極意があるんです」

村井さんによるとそれはめがねなのだそうだ。どんなになれた鳥でもくちばしで顔をつつくことがある。実際に村井さんもコサギに額を2，3回つっつかれたことがある。しかし，めがねをかけていると急所である目は守れる。そこで，いつでも両手をひろげて鳥を迎え入れられるわけだ。こちらが全幅の信頼をもって接すれば，鳥のほうも必ずそれにこたえてくれるというのが村井さんの持論だ。

これは村井さんが，父長八郎さんから教えられたものだという。林野庁の技師であった父親は福島，長野，水戸各営林署長を歴任したが，村井さんは少年時代の夏休みは父といっしょに野山を歩くのが習慣だった。

そして少年の夢は，自然のなかで生息する動物を自分の手で飼育してみることだった。

手飼いのすすめ

小学校2年のとき，福島でカケスのひなを2羽飼ったのが，本格的な飼育の第一歩であった。このカケスがよくなれていっしょに飼っていたウグイスの鳴き声をまねて，ケキョケキョと鳴いていたのを今でもおぼえているという。

それ以来，何種類の鳥を飼ったろう



帯広から釧路へ

釧路では朝日新聞の支局を訪れ，支局長の吉川さんにお目にかかった。僕がこれから本拠地にしようとしている霧多布は浜中町に属し，釧路地方管内の東のはずれに属しているので，原稿その他で以後いろいろとご面倒をお掛けするに違いない。

吉川さんは小柄で痩せてはいるが，雪の吹きだまりを軽やかにとび越えたりして，釧路港が一望に収められる丘の上の小さな喫茶店に案内して下さった。

丘の上にはライラックの林。今でこそ葉が落ち尽くして，黒く細い枝がほんのり青い北国の空に貼りついて網目模様を作っているが，初夏には花をつけ，その強いかおりがむせんばかりにあふれることだろう。

「いい所ですね」

僕がそう賞めると，吉川さんはとめどもなく北海道の素晴らしさを語った。

そして，最後に一言。

「あなた，成長し切ったヒグマを見たことがありますか」

「ええ」

もちろん僕はうなずいて次の言葉を待ったが，質問はそれだけだった。吉川さんは眼を転じて，静かに港を見下している。

あのでっかいおやじを見たことがあるか。

計画の細部を問題にせず，たったそれだけを訊いたのは，いかにも北海道をよく知っているベテラン記者らしかった。

成長したヒグマの姿形は，見ると聞くとでは大違いである。観光客の眼をひくために土産物屋の前につながれているのはほんの子供でしかなく，5年10年とたった成獣は側に寄ると小山のような感じ

ヒグマと2人のイノシシ 2

美わしき霧多布へ

畑　正憲



霧多布，湯沸岬（とうふつみさき）の雪原に立つ筆者

がする。その四肢は僕らの胴ほどもあり，肩や腰には筋肉が盛り上がって力感にあふれ，人間のひ弱さをつくづく思い知らされる。

6年ほど前のことだ。僕の属していたグループが北海道の記録映画を作った時，

「ヒグマならまかしとき」

と胸を叩いた威勢のいいカメラマンがいた。彼は柔道，空手，合気道など武芸百般に通じた偉丈夫だったが，阿寒で本物を見た途端に顔色を変え，列の後尾を歩くようになった。武芸はあくまで人間用に考案されたもので，ヒグマには通用しないことを悟ったのである。

キザな言い草だが，ヒグマと共同生活をするために必要なのは力ではなく，やさしい愛であろう。害を与えない仲間として人を認識させねばならぬ。

それは可能だろうか。

野生動物はその種類によって，家族化する際の難易度が大きく違っている。一般的に言えば，群れを作る動物は比較的慣らし易く，単独生活を好むものは成長するに従って野性をむき出しにするようだ。

だから，たとえ図体は大きくともゾウなどは家族化が易しく，トラやヤマネコは困難である。群れを作るということは，身近に仲間がいることを要求し，ボスの存在を認めることでもある。

後はただ，コンラート・ローレンツがアヒルで典型的に示した〝すりこみ〟を利用すればよい。彼はアヒルの雛を使って，子供の脳に親がすりこまれる時期があることを明確にしたのだ。

動物の脳には，奇妙に不可逆的なところがある。一旦憶えてしまったものには固執するし，そのために身を亡ぼすことだってある。

わかり易い例はイヌである。ちゃんとしたイヌは，乳離れした直後から世話をしてくれた主人を絶対に忘れない。まるで昔の武士のように，二君には相まみえないのである。僕が知っているセパードは，4歳の秋，主人が死んで他所へ貰われ，そこの息子を手ひどく咬んで薬殺されてしまった。

離乳期の仔を手に入れれば，ヒグマといえども友だちにはなれるだろう。しかし厄介なのは，ヒグマには独立する日があることだ。親に保護されて育った子供は，必ずいつか独立する。その際両者の間に，楽しい葛藤が渦巻くことは十分に予想出来る。それをどう切り抜けるかが僕の課題でもある。

もう1つ肝に銘じておかねばならないのは，動物の子供が遊び好きな点である。彼らは，半ば本気でたわむれるが，壊れ易い人間である僕としては，相当の覚悟をしていなければけがをして泣く破目にもなるだろう。

とつおいつそんなことを考えながら，僕は港の見える喫茶店を後にしたのだった。

釧路から浜中町までは約70キロ。自動車で1時間の旅である。車は根室本線にそって静かな雪道を走った。

地図によると，根釧原野は横に広くのび，根室半島のつけ根にまで達している。その端を走っている道は完全に舗装されてはいるが，向こうからくる車はごく僅か，東京では考えられない空きようである。

右側にはしばしば荒涼とした湿地が現われ，左にはサルオガセがまといついた樹林が続いている。1歩中に入ると，穢されぬ自然が続いているのだ。僕は車の窓にかじりついて，1時間もたっぷり楽しんだ。

浜中町という町名は，オタノシケというアイヌがつけた地名に由来しているそうだ。それは浜の中央という意味であり，長い砂地の海岸の中央に霧多布の町があり，その中央にかなり立派な浜中町役場の新庁舎があった。

来意は吉川さんから伝えていただいてあったので，話はとんとん拍子に運んだが，剣暮帰島に住みたいと言うと，鳥居町長，平野主事の2人とも眼を丸くして，

「あそこに住むのですか。夏ならともかく，冬を越した人はいませんよ」

と，一瞬呆れ返り，それから疑惑のマナザシで僕を瞠めた。

「駄目でしょうか」

「駄目じゃないでしょうが，妙なことを思いついたものですね」

「売っていただけると一番いいのですが，それが無理なら，端っこを貸していただくだけで結構です。どうでしょうか」

「それは」

と2人は顔を見合わせ，しばらくして，

「貸すだけならお貸ししましょう。コンブ漁の番屋がありますので，こちらで交渉しておいてあげますよ」

それ見たことか。何事も当たって砕けろである。懸念していた島の件は，こうしてたちまち解決してしまった。

以後，これから続々とこの物語に登場する町の有力者にお目にかかった。どなたも心よく相談に乗って下さり，島の件を確約してくれた。それで僕は，島のどの部分を借りるかは，この人々にお任せしてしまった。

霧多布の長い海岸線はなだらかに湾曲し，琵琶瀬という浜で最も島に近くなる。僕はそこから初めて島を間近に見て，胸をつかれる思いがして立ちすくんだ。

そこには，頭に描いていたロマンチックな雰囲気はひとかけらもなかった。ただ，薄ねずみ色の海の彼方に，うっすらと雪をかぶった黒い岩のかたまりがあるだけだった。家族を引き連れて住むには，あまりにも寒々としているではないか。

島へは小舟で約20分。

役場の人に案内していただいて島へ上陸してみると，不思議にも，うら寂しい感じは消しとんでしまった。それだけが身上である，どこだって住めば都だという気概を取り戻したのである。

島の頂上からは，天然記念物に指定されている原生花園が見え，春の美しさを予想させるに十分だった。左手には，先住民族の古墳がある丘もある。

無人島の上は広い台地。道内でも屈指の野生スズランの名所だという。僕はその花畑のただ中でヒグマとたわむれる自分を早くも想像していた。■

か。フクロウ，カラス，インコ，オウム，ハト，コマドリ，ミミズク，オナガ，キツツキなど比較的手にはいりやすいものから，リュウキュウコノハズク，ルリカケスといった珍鳥を奄美大島から持ち帰ったこともある。

フクロウを飼ったとき，たまには生きたネズミをえさにやるようにいわれ，ハツカネズミを買ってきたが，その顔つきを見ているうちにふびんになってどうしても食べさせることができない。えさにするつもりが反対にえさを与えて飼いだしてしまい，気がついたときはミカン箱3杯にふえていた。

村井さんのこれまでの飼育履歴書には圧倒的に小鳥が多いが，そのほかイヌやネコはもちろん，リス，ハムスター，ウィスター，トカゲ，ウサギなども記載されている。かわいいからとか，きれいだからが原因でなく，目にふれる生きものすべてが，いとしくてならないのだ。

学習院の清明寮に義宮さまがいらしたころのことだ。台所のたなの上にどぶネズミが子どもを生んでいったことがある。まかないの人が退治するというのを押しとどめて，自分の弁当箱にその子ネズミを入れて持ち帰ったこともある。

妻の和子さんも結婚当初，アイロンをかけている最中に，背広のポケットからヘビが出てきて驚いたことがあるが，今では村井さんの〝動物バカ〟にすっかり同化してしまっている。

「主人が帰ってきて玄関の戸をあけると，このアオボウシ（オウム）が『パパ，パパ』って鳴くんです」と，うれしそうに話す。

村井さんの目下の願いは，小型で，飼うのがむずかしいミソサザイを飼育してみることだという。現在，村井家の動物家族はリス，ウサギ，ネコ，インコ，オウム。そして旧男爵の習慣だろうか羽織はかま姿で記者を玄関まで送ってくれたときに，ふところから顔を出したハムスターである。

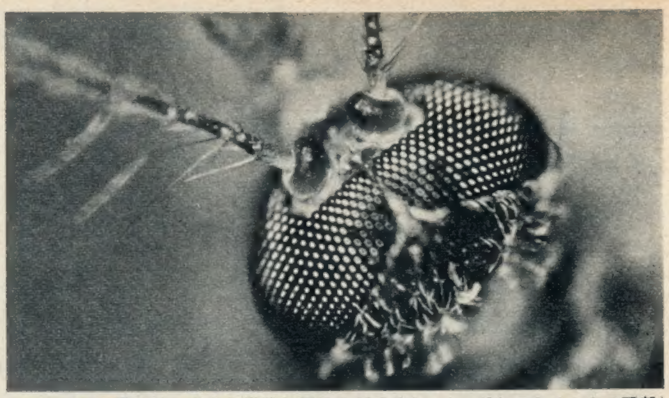
村井さんは最後のあいさつのあとで「動物愛護とか自然保護という前に，なにか動物をひとつ飼ってみることですね」とつけ加えた。■

もうひとつの世界

1

クループ・5プラス1

もうひとつの世界



この目には，どんな世界が写るのだろうか （コガタアカイエカの頭部）
撮影 佐々木 崑

むかしユクスキュルというドイツの動物学者が，〝生物と環境〞という本のなかでおもしろいことを書いている。ひとくちに〝環境〞というが，同じ環境でも動物が違えば，それぞれ異なって見えているというのである。

たとえば，ここに1つの部屋があるとする。部屋の中央にはテーブルがあって，その上に食事が並べられている。テーブルのまわりには何脚かいすがあり，壁ぎわには本だなやピアノが置いてある。部屋の天井からは電燈が下がっている。テーブルもいすも本だなも，もちろんいろいろな色に塗られている。

さて，これはわれわれ人間が見たときの〝この部屋〞である。この同じ部屋をイヌが見たらどうなるだろうか？

イヌは色があまりよく見えないから，全体の色調はモノクロ写真のようになる——動物に詳しい人は，まずこう答えるだろう。

たしかにそうである。しかし，イヌには本だなやらピアノやらまでが，ちゃんと見えているのだろうか？

ユクスキュルはそうでないと考えている。かれの描いた絵では，テーブルの上の食物がいちばん目だった色になっており，テーブルといすが，もう少し薄い色に塗ってある。そして，ピアノや本だなは薄い灰色になっている。これは，イヌの関心の度合いを示すものである。イヌにとって，食物はきわめて強い関心の的である。と同時に，飼い主もつねにイヌの関心事であることはまちがいない。飼い主のすわるいすは，やはりイヌの注意を強くひくはずである。

そしてイヌは嗅覚が発達しているから，食物のにおいや飼い主のにおいのついたいすは，視覚的には他のものと同じ価値をもっていても，もっと強くイヌの注意をそそる。反対に，本だなやピアノはあまり関心をもたれないだろう。

これがユクスキュルの想像である。

もしこの部屋を，1匹のハエが見たらどうなるか？ もちろん食物は強くハエの注意をひく。それは，おそらく嗅覚だけによるものであろう。それとともに，電燈は（もし点燈されていれば），視覚的にたいへん強力な存在である。そして，それ以外のものは，ほとんど存在していないにも等しい。

このように，同じ1つの部屋についても，それを〝見る〞ものが人間であるか，イヌであるか，ハエであるかによって，その様相はまったく違ってしまう。1つの部屋は，決して1つの部屋ではないのである。それは，動物の種類によって，みな違った世界になる。

そればかりではない。同じ動物でも，生理状態が違えば，世界はまるで変わる。このことは，われわれ自身，日常たえず経験していることである。われわれは，世界は1つだと思っている。たしかに客観的世界は1つしかないかもしれないが，ハエもそう思っているのだろう。

もし，われわれが，自分たちの見る世界に固執するならば，われわれはハエとまったく同じように，われわれの世界こそ唯一の世界と思いこむことになろう。世界は動物の種の数だけあることを知ることが，〝われわれ〞の世界を拡大するためには，ぜひとも必要なことである。

× × ×

〝もうひとつの世界〞という言い方には，もう1つの意味がある。

もし人間の世界が，1つの世界であるとすれば，動物はたしかにもう1つの世界である。人間と違って動物たちは，自然のなかに生き，自然のままに暮らしている。かれらは自然の法則に従って生きており，決して人間のように，その法則を意識的に利用したり，逆用したりはしないし，ましてやそれを悪用したりすることはない。かれらの生活は自然であり，平和である。すくなくとも，一般的には，そういう印象がもたれている。

だが，ほんとうにそうなのだろうか？

今，世界は動物の種の数ほどあるといった。動物の種の数は100万とも150万ともいわれる。すくなくとも何万という程度のものではない。そうすると，われわれ人間がばく然と信じている世界は，100万分の1の世界でしかないことになる。

では，その100万は，すべてバラバラで，まったく違う世界であって，なんの共通性もないのだろうか？ 決してそうではないであろう。それではどこが共通で，どこが違うのだろう？

われわれが，もう1つの世界，つまり動物たちの世界を知りたいのは，そのことを知りたいからである。それは，動物をわれわれの役にたてるためではなく，動物たちを知り，同時にそれによって，われわれ自身を知りたいからなのであろう。■（H_1）

四つの葡萄色の瞳 1

アニイが来るまで

江藤 淳

一昨年の夏，まる10年いっしょに暮らしたダーキイにポックリ死なれたときには，やはりもうイヌはやめにしようかと思ったものだ。

イヌをやめて，それじゃあなににしようとは考えなかった。私はただ，もうダーキイがどこにもいないという事実の重みを，しばらくそのままに受けとめていたかっただけだ。

ダーキイがいない。それは単に，10年飼っていた1匹の雌のコッカー・スパニエルが，病気で死んでしまったというだけのことではない。それは朝食のとき，私の椅子のわきにチョキンと坐って，やや儀礼的にパンをひとかけらねだる小さい黒い生きものが，いなくなってしまったということだ。

それはまた，朝食が終わると私の書斎の机のところへ行って，早く原稿をお書きなさい，とさいそくしてくれるものがいなくなったということでもある。毎日毎日，あんまり真剣な顔をして，彼女が机の前で待ち構えているものだから，私はどんなにうんざりしていても，くたびれ切っていても，そのころ延々と書いていた「漱石とその時代」の原稿に向かわないわけにはいかなかった。

なにしろ相手はイヌである。編集者なら弁解をして，少し息ぬきをさせてもらうこともできるが，ダーキイの葡萄色の瞳にじっと見つめられると，ズルケるということがどうしてもできない。そういうわけで，私が机の前に坐ってペンを握ると，ダーキイはニッコリ微笑して，尻尾を私の腰のところにあてがい，安心したようにやがて眠りはじめる。そのやすらかな寝息を聴き，ときどきオナカがゴロゴロ鳴るのを聴いたりしているうちに，何年ごしにもなる仕事をしている疲労と孤独感が癒されて，私はいつの間にか原稿に没頭することができていた。

家の内外でいやなことがあって，私が途方に暮れてソファに寝ころがり，ボンヤリしていたりすると，ダーキイはきまってどこかからとんで来て私の顔をなめはじめ，こっちが笑顔を見せるまではやめようとしなかった。ときには必死になって身体をすり寄せ，文字通り私の胸をあたためようとすることもあった。そういうとき私は，彼女の柔らかい毛並みを黙って何度も撫でた。撫でているうちに途方に暮れた感情はすこしずつうすらぎ，なんとかもうひとふんばりやってみようという気持になった。

そのダーキイがもうどこにもいないという淋しさが，どうしようもないほどのものだということに気がつくためには，実はそう長い月日はかからなかった。ある朝，家内と私はほとんど異口同音にいった。

「やっぱりまた1匹もらうか」

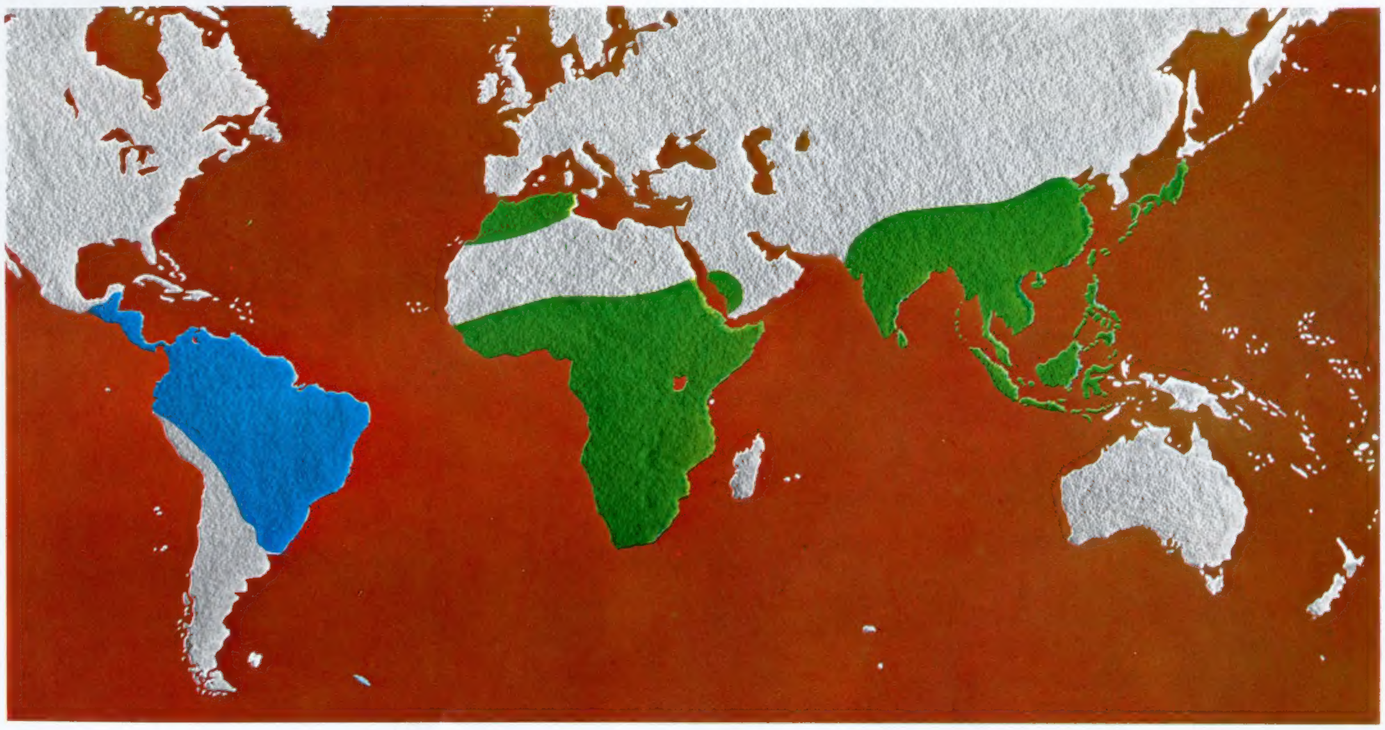
「もらうなら，今度も黒のコッカーにしましょうよ」

そうなると，アニイがやって来るまでに，もう何日もかからなかった。■

霊長目 真猿亜目

霊長目には，ほかにヒト亜目，すなわちヒト属と猿人（化石種）がふくまれる。

亜目	下目	上科	科	属
真猿亜目	狭鼻猿類	類人猿上科	オランウータン科	ゴリラ属
				パン属
				ボンゴ属
			テナガザル科	テナガザル属
		オナガザル上科	ゲレザ科	コロブス属
			オナガザル科	マカック属
				マンドリル属
				ヒヒ属
	広鼻猿類		キヌザル科	キヌザル属
			オマキザル科	クモザル属
				ケブス属
				ホエザル属



世界におけるサルの分布範囲。緑色帯は旧大陸の狭鼻猿類の分布域。青色帯は新大陸の広鼻猿類の分布域。
アフリカ大陸北端の対岸にあるヨーロッパのただ1つの緑色の点はジブラルタルである。

真猿亜目 *Simiae*

いわゆるサル，真猿(しんえん)亜目〔注１〕は，次のような特徴をもっている。

●本来は樹上で生活するが，ときには地上での生活にも適応し，樹上，地上の両方で生活する。

●顔面の大部分には，毛がない。

●頭蓋(ずがい)骨は大きく，よく発達した脳をもっている。

●歯は32本，あるいは36本からなり，正中(せいちゅう・顔面のまん中)で割った片側をとれば，上あごから下あごに，次のように配列されている。門歯２／２，犬歯１／１，小臼歯（きゅうし）２／２あるいは３／３，大臼歯２／２あるいは３／３。〔注２〕

●四肢(しし)は蹠行（しょこう）性——足のうらをかかとまで地面につけて歩く——で，その先端は《ヒトの手》のように，親指を——後肢は必ず，前肢は多くの場合——他の４本の指と対向させることができ，ものをつかむのに適している。つめはたいてい扁平である。

●胸部に２つの乳頭があり，通常１産１子。

●ほとんどすべてが，昼行性である。

●食生活は主として植物食であるが，雑食であることも多い。

サルは——オーストラリアをのぞいて——熱帯地方の大部分に広く分布し，多くは森林にすむ。大脳の発達とその知能程度からみても，サルはヒトについで，もっとも進化した哺乳（ほにゅう）動物である。

サルはヒトの祖先？

人間は，自分たちと同じように足で立って歩くことができ，自分たちに似ているこの動物，サルに，いつも心をひかれてきた。《ヒトはサルの子孫である》という昔からのことばがあるけれども，このサルの仲間とヒトとは，実は遠い親類関係しかない。〔注３〕

サルに対して，好意を示した文明はあまりない。エジプト人は，身近なけものであるヒヒを神獣と考えたが，一方ではこれを飼いならして，木の実をとらせるように仕込んだ。現代ではインドの人たちが，サルを敬って神殿を建て，サルの気まぐれな悪ふざけにも敬意を払っている。古代のローマ人は，闘技場の中でサルを猛獣に向かわせ，サルのしかめづらや，ものまねの芸を見て楽しんでいた。

アラブ人たちは，サルを悪魔の化身と考えている。

われわれがサルを見る目も，このアラブ人の見方とさほど離れてはいない。われわれは，サルをいちばん近い親類だと思っているが，しかしサルのなかに，人間の悪い面を戯画化したものしかみていない。けれどもサルは，そんなに，ぞっとするような動物ではない。からだを人間とくらべてみても，ある種のサルは美しく，よい姿もしている。

サルの形態は，きわめて変化に富んでいる。おとなになったゴリラの雄は，人間より大き







旧大陸のサルは，鼻中隔が薄い。
新大陸のサルは，鼻中隔が厚く
ものをつかむことのできる
尾をもつ場合がある。

クロホエザル（右上）
シロテテナガザル（左下）
赤い耳をしたアカオザル（右下）

PH. HLADIK, PETTER / JACANA, Z. F. A.



く体重も重いが，南アメリカのある種のサルは，リスよりも小さい。太っていて重いもの，ずんぐりして脚（あし）の短いもの，ほっそりと伸びて，優美できゃしゃな姿のもの，尾のあるサルに，尾のないサル。あるものはふさふさした毛でおおわれ，ときには洋服の仕立て師が，洋服に仕立てたいと思うほどの毛のサルがいるかと思えば，毛のごく短いのもいる。

皮膚は黒ずんだ色をしているが，ある種のサルでは，毛のはえていないところが，きわめてあざやかにいろどられているものもある。マンドリルがそれで，顔の色は青と赤だ。スペインのバルセロナ動物園に飼われているあの有名なゴリラのように，白子のサルもいる。その写真は，のちほどお目にかけよう。

いろいろな種類のサルの骨格を調べてみれば，すぐにサルとヒトとのあいだに類似のあることがわかるが，また同時に相違のあることもわかる。ヒトとの相違は，当然サルの生活のしかたに原因がある。アマゾン川流域の森林の木の枝や蔓草のあいだにすむクモザルのように，空中生活をし，身軽で機敏で器用なサルの骨格と，おとなになると木に登るには重すぎて，地上で暮らすゴリラの骨格とは，とても比較することはできない。

サルの知能程度

サルの知能について，決定的な判断を下すことは，ほとんどできない。種によって，知能程度に差があるし，同じ種のサルのあいだにも個体の差がある。数年前に見た小さな雌

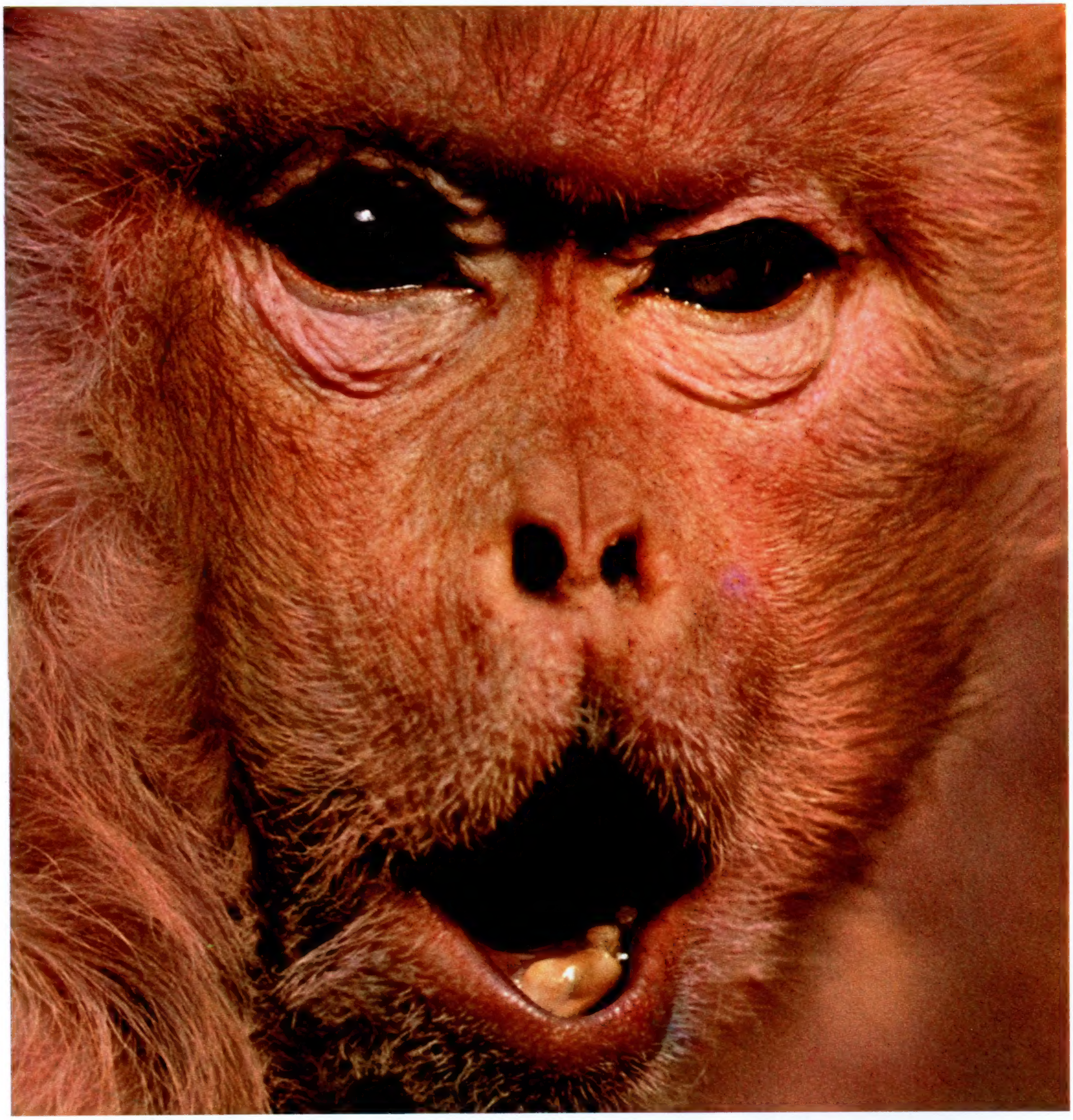






マンドリルの雄（上）
左から右へ
コモンマーモセットとクロクビタマリン
ともにキヌザル科。
右端はテングザル。

PH. Z.F.A., VISAGE/JACANA, ZOO DE FRANCFORT



ゴリラは，女主人や子どもたちといっしょにアパートで暮らしていた。これは特別に気持がやさしくて，ひと言いうと，人がしてほしいと思っていることが，なんでもわかるように思われた。ところが同年齢でも，理解力がきわめて低いゴリラもいるのである。

サルは，ずるく，意地悪で，おこりっぽく，執念深く，好色で，けんか好きで，自己中心的で，陰気なようすのこともあるが，また陽気で，やさしく，世話をしてくれる人には，たっぷり愛情を示すこともある。いろんなおどけた姿をみせて，人の注意をひこうとすることもある。さらにサルには社交性があり，勇敢で，仲間に対する麗しい連帯感と，子どもに対する深い情愛をもっているといえる。ほかの動物や，ほかの群れのものに対しても，弱いものや幼いものを助けることを知っている。

サルは，だいたいにおいて，ほかの哺乳動物よりずっとすぐれた知能をもっている。しかしある実験によれば，ネズミより劣っている。またイルカにあるとされている能力についても，まだ完全にはわかっていない〔注4〕。大型の類人猿は，人に教えられなくても道具を使うことを知っているが，このことは，動

スウェーデンの有名な動物学者リンネは
動物界の最上階に，霊長類という名で
サルとヒトとを，1つにまとめた。
それを裏づけるにじゅうぶんな表情である。
PH. PALNIC-MULLER

物には非常に珍しいことである。たとえば，手の届かないところにあるごちそうを手に入れるのに，２本の棒の端と端をつないで，引き寄せることもできる。

サルの《手》が，知的能力を発達させる機会をサルに与えたことは明らかである〔注5〕。食物を口にもっていったり，石を拾ったり，集めたり，ひっくり返したり，くだものにさわってみたり，用心しながら虫を巣から追いだしたりすること，そういうことがサルの脳の発達を助長した。

サルは考える動物であって，すぐれた記憶力をもち，経験を生かして危険を避けることを知っており，ものをまねる能力を高度にそなえているといえよう。しかし，ときには食いしんぼうであるために，きわめて幼稚なわなにかかることがある。南アメリカのインディアンは，トウモロコシの実を入れた，首の細いつぼを森のあき地に置いて，木の上にすむ小さなサルをつかまえる。サルはトウモロコシを握ろうとして，つぼに手を突っ込む。トウモロコシをいっぱい握った手は，大きすぎて，つぼの口から抜けない。手を開いて，握ったトウモロコシを放そうとは，サルは考えない。こうしてサルはつかまってしまう。

サルは仲間どうし，非常に情が深い。動物のなかには死んだ仲間を食べてしまうものもいるのに，サルは仲間の死体を捨てるのを，たいへんに苦痛とする。

人間に捕えられた大型類人猿の雌は，子どもを満足に育てられない場合が多い。というのは，野生の状態にいれば，若い母ザルは年長のサルから子どもの世話のしかたを習うことになっているからである。このために，類人猿の赤ん坊をうまく育てた動物園は少ない。

サルは，人間とともにすむ動物として，おすすめできる動物ではない。

非常に人なつこい大型類人猿の子どもや小型のキヌザルや，かなりおとなしい南アメリカのヨウモウザルなどは別として，そのほかのサルたちは，気むずかしい動物である。そのうえサルに，人間流の清潔ということを教えることはできない。野生の状態では，自分の毛をよごさないように木の上から，用を足しているからである。

こういうわけで，人に飼われれば，アパートのカーペットの上や，おりの床の上に用を足してしまう。年とったゴリラの雄は地面に，雌と若いゴリラは，木の枝が最初に分かれてまたになったところに，毎晩木の枝や木の葉で寝床をつくる。朝になるとそこで用を足す〔注6〕。たえずえさをもとめて移動するので，ゴリラは同じ寝床へもどることはない。





マカック属のサル。
霊長類の分布の最北限，日本にすむ
ニホンザルの母と子。（上）
PH G. HOLTON

ジブラルタル産のマゴット。
もとからジブラルタルにいたのか
北アフリカのサルの子孫であるのかは不明。
ジブラルタルからこの動物が姿を消す日，イギリスもこの地を失う，といい伝えられている。（下）
PH ATLAS SALOUSTROS



3－6



生活圏と食べ物

サルの分布は，昔は非常に広かった〔注7〕。今日では，熱帯地方に限られている。しかしエチオピアのゲラダヒヒのように，寒さにたえる種類もあるし，またマカック属のサルのあるものは，北緯40度の日本や，ヒマラヤ山脈のふもとの山地や，ヨーロッパのジブラルタルの岩山などにすんでいる。

たいていのサルは，好んで森にすむが，岩山にすむこともある。サルは，もっとも機敏な哺乳類であり，天性の軽わざ師である。からだの重い類人猿をのぞけば，サルは走ったり，とびはねるのが好きで，必要ならば泳ぎもする。サルはやすやすと木々の間をとび，6メートルから8メートルもとぶことができるし，10メートルもの高さからとびおりることができる。

こうした跳躍のとき，あと足と尾は，舵の役割をする。

蔓草やカズラのたぐいは，サルにとってははしごのようなものだし，木の幹は，道のようなものだ。サルは樹冠の上をかけ，すべり，はね，しなやかな枝のばねを利用してさらに遠くにとび，またつかみそこなったものに尾を巻きつけてからだをささえたりする。新大陸にいるサルだけには，この尾が第5の手のように働くものがいる。その尾は先端に毛がなくて，まるで指のように《握ることができる》ので，ものをとることもできるし，木の枝にぶらさがることもできる。

このような軽わざを演じながら，サルは1日じゅう，えさを捜したり，取りっこをしたりするのである。サルはなんでも食べる。あらゆる種類の植物の実，球根，塊茎（かいけい），根，たね，水気のある茎。また昆虫（こんちゅう），幼虫，鳥の卵，そしてサルにとってほんとうのごちそうである小鳥まで。サルたちはしょっちゅう何かを捕えたり，拾ったりしては，においをかいでいる。見つけたものはなんでも，食べるか捨てるかする前に，こうして調べるのである。

リーダーに統御される社会生活

サルの社会生活は，情熱をそそる研究対象である。単独で生活する種は，ほとんどない。家族的な単位，あるいはもっと大きな集団を単位として生活するのを好む動物である。生活に適した地域にすんでいるが，食物が不足するとすぐその場所を捨てる。

農耕地の近くにサルがすみつくと，まったく災難である。サルはなんでもむさぼり食い，あとにはなにも残さないからである。

エチオピアの森で
木の実や木の葉をつむシロクロコロブス。
その優美な姿に似ず
小鳥をつかまえて食べることもある。
PH. J. PREVOST

サバンナヒヒ――イヌのような顔をしたサル――の群れの指揮は，いちばん強く，獰猛な雄がとるが，それは，激しい戦いをし，力によって競争者をしのいだ雄である。この雄はいつでも戦いに応じ，打ち勝つ用意がなければならない。群れのサルは，すべてこのリーダーに従う。同じように雌もこのリーダーに，従順で忠実である。

群れが大きくなりすぎると，ふつう，《長老》の次に強い雄が，年をとった醜い雌たちを連れて，群れは2つに分裂する〔注8〕。サバンナヒヒの生活は，このように雄どうしの不断の戦いで動いているが，いざというときには共同の敵に対して，雄どうしが団結して戦うこともある。

あらゆるヒヒ属に固有の，この社会組織について詳しく述べてもいいが，それはあとでこの仲間たちをとくに取りあげるときに，よくあらためて述べることにしよう。

ところで，こんなことに気づいた人もあるだろう。動物園のヒヒを見ると，よくおたがいに熱心にシラミのとりっこをしている。実は，これは仲間たちの毛のなかに隠れているこのやっかいものを，ただ取っているだけではない。それは，欲得を離れた愛情を表わす行為なのだ。自分の支配者でもあり，主人でもある雄のシラミをとる雌は，それによってやさしさや，敬意，愛着や情愛を示しているのである。

リーダーはこうした敬意を，ごく自然に受け入れる。自分にそれだけの値うちのあることを知っているからである。群れの安全は，リーダーの警戒心と慎重さと勇気と，公平な判断にかかっている。動物園で，幼いサルが年長の強いサルにいじめられているのを，長老のサルがかばってやっている，という情景はしばしば見かけるところである。

異なった種のサルどうしが，仲良くなることがあることも，知っておく必要がある。しかしこの場合も――こういうことは，人に捕えられた動物のあいだでは，よく起こるのだが――優劣の関係がすぐに生まれて，いつでも結局はいちばん強いものが，他のものに自分の意思を押しつけることになる。

サルは，話すことができない。若い類人猿で実験したところでは，飲んだり食べたりしたいというときに使う，なんとか意味のわかる，10ほどの音声を記録できたくらいであった。〔注9〕

しかしサルどうしは，さまざまな感情を表わす音声で，たがいに連絡をとるが，それは，ときには人間にもわかることがある。恐怖の叫びはいつも同じで，恐れを表わすしかめづ

らをしながら、短い不協和な叫びを続ける。この合図を聞くと、サルの群れはひとととびで逃げだし、安全地帯に駆けていく。

母と子の関係

サルは通常1産1子で、実によく子ザルの世話をやく。子ザルは生まれるとすぐに手足で母ザルにしがみつき、母ザルは子を胸にしがみつかせたままで歩いている。少したつと、子ザルは、母ザルの背に乗るようになる。母ザルは子ザルを腕にかかえ、揺すったり、抱きしめたり、腕をつかんだりして見せびらかす。スイスのバーゼルの動物園で、大きな雌のゴリラが子を頭の上にのせていた。からだじゅう柔らかい毛でおおわれ、頭が黒くてからだはかっ色の子ザルは、母親が果実を食べているあいだ、力いっぱい母親にしがみついていた。

子ザルは成長すると、勝手に動きまわってあたりを駆けまわる。しかしちょっとでも危険なことがあると、母ザルのそばに逃げる。母ザルがちょっと呼べば、子ザルはすぐもどってくる。子ザルがいうことをきかなければ、母ザルはこらしめるのだが、そんなことはまずない。子ザルのほうが、人間の子どもよりも、いうことをよくきくようだ。

最後にサルは、そのすぐれた神経組織と高い知能によって、哺乳類のもっとも重要な目（もく）の1つを構成しているということを、いっておかなくてはならない。動物の進化のうえで、樹上生活の決定的な影響について、もう一度注目すべきである。それは四肢がみんな手になっているということである。手足の親指と手足の他の指とを向かい合いにして、手も足も、ものをつかむことができるという点である。前肢（ぜんし）、つまり手を移動以外のことに使ったために、これがからだを直立させ、脳容量を著しく増大させ、ついで、知能を発達させた。そして完全な立体視も可能となり、色を識別する能力もそなわるようになった。

この真猿亜目は、2つの下目（げもく）に分かれている。狭鼻猿（きょうびえん）類と、広鼻猿（こうびえん）類である。

狭鼻猿類 *Catarhini*

旧大陸、おもにアフリカとアジアのサル——ヨーロッパには1種類だけがいる——は、狭鼻猿（きょうびえん）類というグループをつくっていて、その特徴は鼻孔が下へ向かって開いていることと、鼻孔の間の鼻中隔が薄いことである。

狭鼻猿類のグループは、次のような特徴をもっている。

- ●ヒトと同じように、歯は32本
- ●扁平なつめ。
- ●種によっては、はでな色の厚くかたい臀部（でんぶ）をもつ。
- ●尾でものをつかむことはできない。また尾のない種もある

狭鼻猿は2つの上科に分けられる。類人猿上科と、オナガザル上科である。

類人猿上科 *Anthropomorph*

ゴリラ、チンパンジー、オランウータンを見ていると、その目つきや表情や態度などに、なにか人間に似たものがあるのに気づく。とくにそれは、若い個体の場合に著しい。

というのは、非常な高齢になると、多少こうした類似性がなくなるからである。この上科のものにアントロホモルフ（類人猿 *Anthropomorph* ギリシャ語の *anthropos* はヒト、*morf* は形の意）という名が与えられたのは、この理由からである。

この上科のサルは、次のような特徴をもっている。

- ●からだは大きく、胸部が非常に発達している（テナガザルは例外である）。
- ●前肢（ぜんし）は後肢より長い。手足の親指は、他の指と向かい合わせにできる。四肢で歩くときは、前肢の指を折り曲げて、その背面を地面につける。
- ●歯は、非常に発達した犬歯があり、ヒトのように32本で、左右とも上から下へ、次のように配列されている。門歯2／2、犬歯1／1、小臼歯（きゅうし）2／2、大臼歯3／3
- ●顔は無毛で、耳にも毛がなくて丸い。
- ●尾はまったくない。

類人猿は、森林にすむ。昼行性で、集団生活を営んでいる。——つまり多かれ少なかれ群れをなして生活し、果実と木の葉を食べるが、ときには小さな動物や卵を食べる。

分布の範囲は赤道アフリカ、西部アフリカとマレー半島をふくむ東南アジアである。この上科には化石種となったものも多く、それらは地理的には、現在よりもさらに広く分布していた。現在それは、2つの科に分けられている。オランウータン科、あるいは、いわゆる類人猿科と、テナガザル科またはギボン科である。

オランウータン科 *Pongidae*

オランウータン科は、ヒトにもっとも近いサルの仲間である。それはまた霊長目（もく）のなかでもっとも大きく、身長と比較してその頭蓋（ずがい）の大きい点に特徴がある。この科はゴリラ、パン、ポンゴの3つの属からなり、それぞれ次の種、すなわちゴリラ、チンパンジー、オランウータンがある。

ゴリラ *Gorilla gorilla*

類人猿のなかでも、体重、身長ともにもっとも大きい。飼育されたおとなの雄の場合、立つと身長は2メートル、体重は300キロ以上にも達することのある、巨大でぎょっとするような動物である〔注10〕。西アフリカと中央アフリカの森林にすんでいて、本来植物食である。

ゴリラの歴史、より正確にいえばゴリラの発見は、非常な古代にさかのぼる。今から2000年以上もむかし、カルタゴの船隊が、現在のチュニス——アフリカ、チュニジアの首都、昔のカルタゴはここから遠くないところにあった——の町のある場所から船出した。船隊は航海者ハンノに率いられ、ヘラクレスの柱—ジブラルタル海峡—を越え、西アフリカ沿岸にそって南下し、そこに植民地を建設することを使命としていた。

ところで、食料の欠乏からハンノ隊長は、アフリカ西海岸のシエラレオネを少し過ぎたところで、あともどりをしなければならなくなった。そのときのことを書いたハンノの報告が残されている。

「この場所を離れて3日後、われわれはある湾に着いた。湾の端には1つの島があった。島のまん中に、湖をみつけたが、その湖のなかには、野獣のすむ小島があった。その動物は、からだじゅう毛におおわれていて、案内人はこれを《ゴリラ》と呼んでいた。われわれは、その動物を追っていったが、雄には近づけなかった。雄は岩によじ登ると、小石を投げつけて、われわれから、やすやすと逃げていった。苦心のすえ、ついに3頭の雌をつかまえたが、ひっかいたり、かみついたりするので、船まで連れてこられなかった。そこで、この皮をカルタゴへ持ちかえるためには、3頭の雌を殺さなくてはならなかった」

ローマ時代の著述家であるプリニウスによれば、このゴリラの皮は、カルタゴの町のある神殿に保存されていたということである。

現在では、ハンノの探検によって発見され



ヒトと類人猿とは，成長するに従って，類似点が少なくなる。しかし，この幼いチンパンジーが，親指を吸っているようすは，なんと驚くばかりヒトに似ているではないか！
PH. Z. F. A.







このオランウータンの目の柔和さ，これは，敵を知らぬものの表情である。アジア産のこの大型のサルは，人を避けるが，それは人を恐れてのことではない。
PH. Z. F. A.



夕陽にそまって
ひとりアカシアの木にたたずむ
アフリカのサバンナモンキー。(3—10, 11)
PH. RUSS KINNE

これらのアカゲザルは
統制のとれた1つの群れをつくっている。
指揮をするおとなの雄
つまり《リーダー》に
この赤ん坊の運命もかかっている。
PH. RUSS KINNE

たこの《野獣》は，実際にはチンパンジーであったと考えられている。しかしこの報告のおもしろいところは，そこにはじめてゴリラという名が使われていることである。

ゴリラの身体的特徴

ゴリラの達しうる身長と体重についてはすでにしるしたが，その外観に関して，もっと詳しく，いくつかの補足をしておこう。身長は中くらいのもので1.25メートルから1.75メートル，雌は雄よりも小さい。ひろげた腕のさしわたしは身長以上で，2メートルから2.75メートル。胸囲は1.25メートルから1.75メートルもあり，中くらいのものの体重は，140キロから275キロの間で，さまざまである。

ゴリラのもっともきわだった特徴のなかでも，前肢の長いことと，強いこと，大きくてずんぐりした胴体，手足の長さのふつりあいなこと，中3本の指が，1つの膜でつながっていることなどは，とくに注意をひく。まゆの張りだしは非常に目だつが，それは皮膚が厚く，そのうえそこにおおいかぶさって，かっ色の小さい目をさらに深く沈めている，毛の多いまゆのためにいっそう強調されている。

鼻は中央が平らで，両わきが非常に広い。口は大きく，くちびるは厚いが，ほかの類人猿ほど突きだしておらず，またそれほど動かない。このためいっそうヒトのくちびるに似ている。耳はチンパンジーのものより小さいが，ヒトの耳より大きく，他のすべてのサルよりも，ヒトの耳に近い。首は非常に短く，胴体に沈みこんだようになっていて，頭が直接胴にのっかっているようである。胸部はいかにもたくましい感じで，幅，厚みともに，ほとんどけたはずれといってよい大きさである。このけたはずれの大きさは，肩とややねこ背の背中についても同様である。腹部は，全体が丸く突きでている。

四肢は，どこの部分もほぼ同じ太さであるという点で，ヒトのものとは違っている。事実，上腕の力こぶの盛り上がりはなく，足にはふくらはぎがないようである。手首のところが，はっきり細くなってはいなくて，腕の先に，いきなり巨大で，短く幅広く，厚い手がついている。中央の3本の指は，まるではれあがっているように，とくに太く，指の基節のところまで，1枚の膜でつながっている。親指は，他のすべての類人猿の場合と同じく小さくて，やっと他の指の半分の長さである。つめはヒトのつめに似ているが，指の大きさにくらべて，たいへん小さい。

足はずんぐりで，幅広である。親指はとくに長くて，がんじょうで，先端が太くなっており，よく動かすことができて，他の指との間の角度を60度までひろげることができる。もっとも長い足の指は第3指で，いちばん短いのは小指である。まん中の3本の指は，基節の半ばまで1枚の膜で結ばれている。

毛は柔らかく，かなり長くて，どちらかというと羊毛のようだが，頭部の前面，つまりまゆからあごまでは毛がない。耳および手足の外側と内側，指には毛がない。

毛は，下から上に向かってはえている前腕の毛以外は，必ず前から後ろに，上から下に向かってはえている。露出した皮膚の部分は黒ずんだねずみ色で，毛のはえているところは，暗いかっ色のはだ色になっている。毛の色は暗い灰色を基調とした，種々の色調をもっているが，赤茶けた毛や，明るい灰色の毛があざやかに混じっている。雄と雌，子どもとおとなでは——体長と体重をのぞけば——ほとんど違いはない。しかし，非常に年をとった雄は灰色になり，若いものは，まだ成熟しきらないすべての動物がつねにそうであるように，つりあいのとれない形をしている。

ゴリラの歯はものすごい。とくに犬歯は大型の食肉動物のものと同じくらい発達していて，その気でかめば人を殺すだけの力はある。

がんじょうな骨格は，からだの大きさとつりあっている。ゴリラの頭蓋（ずがい）骨の上には，縦に隆起したかたい骨ばった突起部があるのと，頭蓋骨の長く狭いその内部が，脳髄を入れるには，あまりに小さいのに驚く。まゆの上の隆起，ほお骨の張り出し，巨大なあご，腕骨と13本の肋骨（ろっこつ）の太さなど，ゴリラの骨格はどこをみても，絶大な力を思わせる。

ゴリラは雌は15歳，雄は18歳でおとなになる〔注11〕。もっともよい条件がそろえば，50歳くらいまで生きられると考えられている。

2亜種のゴリラ

ゴリラは地上で暮らすものと，もっぱら森のなかで生活するものと，はっきり2つの亜種に分けられる。ローランドゴリラ *Gorilla gorilla gorilla* とマウンテンゴリラ *Gorilla gorilla beringei* である。

前者は赤道直下の森林地帯の西の部分にすみ，後者はずっと東の方，コンゴ東部のキブ湖とビルンガ火山帯地方にある山岳地帯で，樹林の多い，かなり狭い地域にすんでいる。〔注12〕

この2亜種，ことにマウンテンゴリラのほうは，急速に減少している。おそらくあと数十年もすれば，ゴリラは見つからなくなるだろう。アフリカの西部から中央部にかけての広大な地域にゴリラがすんでいたのは，それほど古いことではない。生物環境の深刻な変化，つまり原始林の侵食とか，人口の増加，耕作地，家畜の群れ，交通路の増大といったことが，ゴリラをより脅威の少ない土地に追いやってしまったのだ。それぞれ形態学上の特徴と，固有の生活様式をもったこれら2亜種のゴリラは，今日では1000キロ以上も離れて分布している。

航海者ハンノ以後何人もの探検家が，かれらのたずねたところにゴリラのいたことをしるしている。16世紀の末ごろ，傭兵のアンドレ・バッテルという人が，南ギニアにいった。バッテルは巨大なサルについて，次のように書いている。

「森林はヒヒやオナガザルやオウムでいっぱいなので，だれもあえてその森へはいっていくものはいなかった。そのうえ，2種類の怪物のようなものがいて，みんなをこわがらせている。原住民たちは，大きいほうを《ポンゴ》，もう一方を《アンセゴ》と呼んでいる。ポンゴはヒトに似ているが，法外な背たけがあり，巨人のようだといったほうが適切であろう。その目は，非常に落ちこんでいて，そのうえに毛深いまゆがある。顔と耳には，手と同じように毛がない。からだは暗色の，まばらな毛におおわれている。この動物は雨を避けるのに，屋根のようなものをつくって，森のなかで眠る。その食物は，木の実である。決して肉食はしない。話すことはできず，知能の程度はきわめて低い」

「原住民たちが，やむをえず夜のあいだに森を通らなければならないときには，火をたいてそのまわりに集まる。明け方，原住民が立ち去ると，ポンゴは火のそばに集まってきて，お祭りをする。しかしまきをくべることを知らないので，火は消えてしまう。ときにはポンゴが群れをなして集まってきて，森林に住む原住民たちを大ぜい殺すことがある。通りかかったゾウにさえ襲いかかって，ゾウが悲鳴をあげて逃げだすまでなぐりかかる。だれひとりとして，ポンゴを生けどりにした人はいない。毒矢を使って子どものポンゴを殺すのは，わりあいやさしいが，ポンゴを押えつけるのは10人がかりでも，まずできないからである」

「幼いポンゴは，非常な力で母親のからだにしがみつくので，たまたま原住民たちが雌を殺すと，母親から離れまいとする子どもまで，同時につかまえてしまう。ポンゴが死ぬと，その仲間は死がいの上に，木の枝を山のようにかぶせる。こうしてできた塚に，森でときどき出会うことがある」



このおとなのゴリラは、草のなかにすわって
夢想にふけっているかのようだ。
ゴリラに出会ったことのある人はみな
恐怖と尊敬の気持で、かれを語るが
ゴリラは、身を守るときにしか攻撃しない。

PH. OKAPIA.

3－15



この６枚のクロッキーは
飼いならされたゴリラの子どもの
日常のしぐさを描いたものである。

多少の誇張や不正確な点があるとはいえ、16世紀のこの探検家の物語は、すでにゴリラの生活についてのある概念を与えている。

アメリカの宣教師ウィルソン某が、ゴリラの頭蓋骨を入手するのに成功したのが、やっと1846年のことで、それはただちに未知の動物として分類された。

旅行家リードのゴリラ探検記

この動物のことを書いた人のなかに、リードという有名な旅行家がいる。以下、少し長くリードからの引用をしてみよう。

「わたしがゴリラのすむ地方の村にはいって、まず心がけたのは、かつて原住民がゴリラを殺したことがあるかどうかと聞くことだった。殺したことのある原住民を見つけると、通訳に手伝ってもらって、そのサルの性行、習慣についてたずねた」

「こうしてわたしは、チンパンジーは、林のなかでも木の少ないところにすむのが好きなのに、ゴリラのほうは、うっそうと茂った森の薄暗がりが好きだということを教わった。ゴリラは四肢で移動し、ときには単独で、ときには雌と子を１頭ずつ連れている。ゴリラは地面からやすやすと手の届く木の枝や葉をちぎりとるが、木の実をとりに木によじ登ることも珍しくはない。ゴリラは朝に夕に、ぶつぶつと不平をこぼすような声をたてて、サトウキビをかじりに村までやってきて、畑のまわりをうろつく。夜は１本の木を選んで、そこに寝る。雌が妊娠すると、雄は樹上５メートルから８メートルの高さのところに巣のようなものをつくってやる。これはあけっ放しの、ほぼ円形をした寝床で、枝や葉を積みあげてつくるのである。雌はこの原始的な巣で子を生むと、すぐにそこを離れる」

「交尾期には、雄たちは雌を自分のものにするために争う。信用のおけるある目撃者は、２頭の雄の間の激しい争いをまのあたりに見たが、このときは、最後には弱いほうが殺されてしまったという。この巨猿の声は、ふだんはぶつぶついうような声だが、おこるとしわがれた鋭い声となり、それはトラのほえ声に似ている。なんでも決まって大げさにいう傾向のある原住民たちは、ゴリラの凶暴性について、とてつもない話を、いろいろと聞かせてくれたが、実際にゴリラ狩りをしたことのある人に聞く機会があって、いっそう信頼のできる情報を得ることができた。この人たちは、ゴリラは、挑発(ちょうはつ)されなければ、人を襲うことはないと主張する。《ゴリラをそっとしておいてやりなさい。そうすればあちらでも、同じようにおとなしくしていますよ》とかれらはいうのである」

「食事をしているときや眠っているときに襲われると、ゴリラは急にふり向いてじゃまをしたものの目を見すえ、抗議の咆哮(ほうこう)をあげる。逃げだすこともあるが、たいていの場合、狩人の弾丸がそれるか、あるいは致命傷に達しないときは、恐ろしい目をし、ひきつったように口をゆがめ、頭の毛をさかだてて、狩人に襲いかかる。しかし狩人のほうはたいていいつも、うまいぐあいに逃げおおせる。こういったことでゴリラは、走るのがあまり機敏ではないとされている。ゴリラはその４本の《手》のどれかで、取りたいと思うものを見境なしにつかむ。それがもし敵であり、たとえば狩人の腕などであれば、口にもっていってかみつく。ゴリラが小銃の銃身を歯でかみ砕くという話は、それほど驚くには当たらない。この動物のあごは、非常に強力なので、実は人のいうほどにはかたくないバーミンガム鋼でできた鉄砲なら、おそらくやすやすとかみ砕くことができるだろう」

「わたしは何度か、人がゴリラに殺されたというのを聞いたことがある。わたしは、このサルにかまれたことのある原住民の狩人を案内人として雇った。かれの手は完全に変形していて、手首には明らかにかまれた傷あとがあった。わたしは、できるだけ正確にゴリラの攻撃のしかたを話してくれるように頼み、かれを助けて、わたしが狩人に、かれがゴリラになってみた。かれは四つんばいになり、わたしが引き金を引くまねをすると、四つ足でわたしのほうにかけてきて、片手でわたしの手首をとらえ、口にもっていってかむようなふりをした。そして、逃げていった。案内人は、ゴリラはたしかにこのようにしたと断言した」

「おわかりのように、原住民から非常に正確な情報を得るのには、このようなちょっとしたくふうでじゅうぶんである。かれらは異口同音に、ヒョウのほうがゴリラよりはるかに危険だと認めている。ゴリラやチンパンジーが、じゃまをされれば、人を攻撃することがあるというのも真実なのである。これはオランウータンについてもいえることで、一般に大部分の動物、ゾウから昆虫にいたるまで、このことはいえるだろう」

昔は、生きているゴリラをヨーロッパへ運ぶのはむずかしいことだった。なぜならゴリラにとって、航海はつねに致命的なことだったのである。

かつて、うまくイギリスに１頭のゴリラの子どもを連れていくのに成功したが、残念なことに飼育することができなかった。



最初のゴリラ飼育記

中央アフリカ、ブラザビル・コンゴ西海岸の町、ロアンゴへの探検隊に加わった２人のドイツ人が、ゴリラの子どもの飼育に成功した最初の人である。探検隊の医師で、高名な動物学者のファルケンシュタインが、たまたまゴリラを手に入れて、はじめ現地アフリカで観察し、ついでベルリンの水族館で研究した。以下は、このゴリラについてのファルケンシュタインの報告である。

1875年10月２日、ロアンゴ南東の港町ポアント・ノアールに着いたわたしは、あるポルトガル人のやっている店にはいったところ、鎖につながれた１頭のゴリラの子どもを見つけた。それは、そのゴリラの母親を殺した原住民が連れてきて、少し前からそこにいるのだということだった。ヨーロッパに送って、できるだけ高く売るために、船がくるまで生かしておこうと、そこの連中は懸命になっていた。それは幼い雄ゴリラだったが、ほんとうに悲しそうな顔つきで、ほとんど何も食べず、その生まれた森からとってきたくだものさえ受けつけなかった。船に乗せたらきっと死んでしまう。そこでひとつ助けてやろうと、わたしが乗りだした。わたしは、かなりのあいだ鮮度を保てるくだものを、いろいろ集めさせた。それからこのチビに栄養をつけ、弱ったからだをもとにもどすようにと、乳のたくさん出る雌のヤギを１頭捜してこさせた。ゴリラは――バナナ、オレンジ、マンゴーなど――人間が栽培したくだものを食べるのにもしだいに慣れ、やがて元気を取りもどした。かれはわたしたちといっしょに食事をするようになり、気に入ったものには、なんでも手を出した。かれの胃は、こうした、変化に富んだ新しい食事にだんだん慣れ、ヨーロッパへこのゴリラを送ることを考えてもいい時期がきた。

「ゴリラは、ナチュラリストと探検家の報告では、獰猛で飼いならせない動物ということになっている。決定的な判断を下すことはできないが、この小さな囚人に限っては、つねにたいへんおとなしかったということはいえる。数週間たつと、かれは新しい環境やまわりの人びとにたいへんよくなれたので、ある程度の自由を与えてもよいようになった。

「おりに入れたり、つないでおく必要はまったくなかった。かれには自分の立場がわかっていて、わたしたちにめんどうをみてもらわなければ死んでしまうということを知っているかのようだった。かれはわたしたちになつき、底なしの信頼を示した。ときには強情で、気まぐれなこともあったが、決して根性曲がりでも凶暴でもなかった。いろいろと種類の違った声をだして、自分の意思を表わした。

「何かをしてもらいたいときには、柔らかい嘆くような独特な声をだした。こわがると、刺すような叫び声を発するのだった。ときにはうなることがあって、そんな場合には人を寄せつけない。うれしいときには、立ったまま握りこぶしで胸をたたく習性があることを、わたしはこの目で確かめることができた。それはまるで、太鼓がドン、ドンと鳴る音を聞いているようだった。またときには――だれも教えたわけではなかったが――人間のするように、両手で拍手をすることがあった。

「かれは、落ちついた確実な手つきで、茶わんやコップをつかみ、それを両手で口にもっていって飲むのが、たいそううまかった。それから、机の上にそれをていねいにもどすのだった。コップ１つでも、かれがこわしたと

ゴリラの赤ん坊は
世話をしてくれる人に
容易になつく。
たいへんおとなしいが
そのからだには、すでに非常な力を秘めている。
PH. P POPPER



ゴリラには，マウンテンゴリラと
ローランドゴリラの２亜種がある。
マウンテンゴリラは，より力が強く，体色が黒く，毛深い。かつては，もっと広くに分布した。
PH. RUSS KINNE



この図は，ゴリラの分布地域を示す。
左のほうの赤色帯は
ローランドゴリラの生息地。
右のほうの緑色帯は
マウンテンゴリラの生息地。

いう記憶はない。しかし，わたしたちはこのゴリラを，もっとも自然に近い状態でヨーロッパに連れていくつもりだったから，そういう動作を教えたものはひとりもいなかったのである。かれは親指と人さし指と中指で食物をはさみ，静かに食べた。そして食べているものを取りあげるふりをしても，冗談とわかれば，おこりさえしなかった。そのかわり，食事をやるのが遅れると，しんぼうしきれなくて，机に置いたさらから目を離さず，うなるのだった。

「たまたま召し使いが，さらがすっかりからにならないうちに下げていくようなことがあると，かれはおどすようになって，召し使いの腕をつかんでかみつこうとするのだった。かれは若々しい元気さで，かなりじょうずに木登りをしたが，まるで用心しないものだから，ある日などは木のてっぺんから落ちたほどだ。その木は，あまり高くなかったのでよかった。しかし，このことから，わたしは，ゴリラは樹上で生活はできないという結論に達した」

「わたしたちの友人は，きたないことはきらいだった。それどころか，生まれつきのきれい好きな性質をみせたものだ。たとえばクモの巣に手を突っ込んでしまったりすると，たちまち気持ち悪そうに顔をしかめて，それを取りのけようとする。そして，うまくいかないと，助けてくれというように，わたしたちのほうに手を差しだすのだった。そのくせにおいだと，どんなに胸のむかつくようなにおいでも，いやではないらしかった。水浴びをするときは，おもしろがってどろ水のなかを歩いた。それがすむと砂の上をうれしそうに歩いていって，ほかのサルと遊ぶのだった」

「このゴリラは気だてがよかったが，なかなか抜けめがなかった。ときどきいたずらすると，わたしたちが罰をくわせることがあった。かれは罰を受けるには受けたが，いつもしぶしぶで，すぐわたしたちの足を抱いては許しを求め，ついこちらが負けてしまわないではいられないような目で，じっと見るのだった。何かほしいものがあると，ちょうど子どもがそんなときにするのとまるで同じように，ありとあらゆるしぐさで，わからせようとした。すぐに望みがかなえられないと，あきらめたふりをして，それから細心巧妙に仕返しをたくらむのだった。たとえばかれを，部屋から出さないことにしたとする。かれはごく何気ないようすで，戸口の近くにいってうずくまる。人がかれのことを忘れているとみてとると，あらゆる機会をのがさず，少しずつ戸口に近づき始める。そして最後に，用心深そうな視線を投げかけて，おもてにとびだすのだ」

「砂糖やくだものを盗んでやろうと思いついたときにも，同じ手を使った。望みの品がはいっている戸だなからなるたけ遠いところにわざわざいってすわり，人が見ていなくなるのを待って，砂糖つぼやくだものざらにとびかかり，口いっぱいに詰め込むのだった。現場をつかまえると，すたこら逃げるが，取ったものは決して離さないから，いうことをきく気は少しもないことを，全身で示していた」

「たる，さら，なべといった，音のでるものが手にはいると，なんでもたたいて音をたてるのが大好きだった。そして，ひまさえあれば鳴らしているのだった」

「ところが一方，どこからくるのか自分にわからない音はこわがった。たとえば雷の音とか，屋根に鳴る雨の音などである。まったく思いがけなく腹に響く，ラッパや呼び子の音はだいきらいだった。ラッパや呼び子の音のためにたびたび便秘をおこした」

今日，大きな動物園ではゴリラの飼育にたいてい成功している。動物園で生まれるゴリラがますますふえるようになってきているが，これは，こうした施設に動物を補給する，明らかに，いちばんよい方法である。

ふさぎがちでおとなしい動物

実は，たいへんもろいところのあるこの大型のサルを，健康に育てることができるようになったのは，近年の動物学者たちの研究の成果なのである。そういう専門家たちはコンゴ東部のキブ山地の森林のまん中で，ゴリラの小さな集団の近くで生活し，ゴリラをおこらせたり，こわがらせたりしないようにして，ゴリラに受け入れてもらえるようにしながら，何週間も過ごしたのである。

そのようにして，かれらはゴリラの生態を細かく観察することができた。こうしたやり方のおかげで，ゴリラが好む食物のリストが作られ，ゴリラの習性が記録された。長い間，恐ろしい怪物と考えられていたこの巨大なサルが，実は気が小さく，おとなしく，いくぶんふさぎがちな動物で，好きな食物をそっともいで１日じゅう過ごし，じゃまがはいると，魔法のように音もなく姿を消す動物であることが，やっと明らかになった。

しかしそうはいっても，捕えたゴリラについてヨーロッパや日本やアメリカで行なわれた研究によれば，ゴリラは力が強いので，少しでもおこらせれば，非常に危険な動物になるということは，やはり事実である。

２つの世界大戦のあいだに，ニューヨーク

最近の研究によれば
ゴリラ社会にみられる階層性は
肉体的な力ではなくて，各個体の性格に
基づいている，といわれる。（右）
PH. J. COOKE



3–19



3－20

おとなのゴリラの顔は
なにか恐ろしげだ。
この顔つきのせいで、悪評をかっているが
ほんとうは、気が小さくて
穏和な動物である。

PH. ZALEWSKI-RAPHO

動物園で飼われていた、みごとなおとなのゴリラを例にあげることができる。度はずれた身長と体重をもったこのゴリラは、非常におとなしかったが、あるとき映画の撮影の途中、生きたまま火あぶりになりかけたことがあった。この事件で気が転倒して、このゴリラは極度に危険なけものになってしまった。

飼育係はゴリラの気を静める方法として、ふつうの人がふたりがかりでやっと持ちあげられるくらいの、大きな重いタイヤを手に入れ、これをゴリラに与えたのである。ゴリラは怒り狂うと、両手でこのタイヤをつかんで、持ちあげ、さんざんねじったり折り曲げたりして、ひとりでに神経の発作がすっかり静まり、おさまるまで、くたくたに力を使い果たすのだった。それがすむと、《おもちゃ》をおりのすみに投げすてて、眠りこむのである。

このことは、肉体的能力をじゅうぶんにそなえたゴリラの、300キロの体内にひそむ力が、いかに巨大、絶大であるかを示している。

それだけではない。ゴリラはおこるとかみつくのだ。すでに述べたように、ゴリラの歯はライオンやトラの歯と同じくらい恐るべきものである。それゆえ、神経がたかぶっているときには、飼育係でもゴリラのおりや、囲いの中にははいらないのである。こうしたことを知ってみれば、アフリカの森林のまん中で、怒り狂ったゴリラにふいに出くわした探検家が、どんな恐怖を感じたかは容易に想像することができる。

今日ではよく知られているように、このからだの大きな、気の小さいけものは、危険になる直前に攻撃をやめることがある。だが、初期の探検家たちは、そんなことは知らなかった。そのおかげで、多数のゴリラが、理由もない恐怖を探検家たちに与えて、そのために殺され、命を捨てたのである。

グロミエ博士は、アフリカの野獣を現地で、自然のままの状態で、はじめて写真にとった1人であるが、ある日キブ山地で、雄のゴリラから、そのような攻撃を受けたという。忘れられないこのときの出会いを語った最後に、グロミエ博士は次のように結んだ。

「……要するに、この巨大な類人猿は、騒々しく音をたて、相手をおびえさせようとして、恐ろしい声をあげたり、胸を太鼓のようにたたいたり、すさまじい形相や身ぶり手ぶりで、敵にしっぽを巻かせるが、実は格闘にならないうちに先制権をにぎるよう、つねに知恵をはたらかせているのであって、ほんとうに攻撃をかけることは、決してしないのだ。そう考えながらわたしはこの土地を去った」

もうだいぶ前のことになるこの見解が、それ以来、野生地帯でゴリラに近づいたことのあるすべての人から確認されている。

マウンテンゴリラの、最後の生息地である火山の斜面の処女林のなかで、何週間も、何か月も過ごした人たちがいる。ドイツ、フランス、ベルギー、アメリカなどの人びとである。その生息地は、しだいに狭くなりつつある。周辺に住む牧畜民が、ゴリラの生息地をたえず侵して、そこに家畜の群れを追い込んでいくからである。サルは怒りはしない。初期の探検家が信じたように、人を殺したりはしないで、森のさらに奥深くへ逃げていくのである。

かれらの土地が小さくなりすぎる日、それは、こんなにも研究者の情熱をそそり、生態観察の意欲をかき立てている種が、消滅する日だ。その日は、まちがいなくそう遠いことではない。もし、ゴリラが自由に生きられるキブ地方を保護するために、なんらかの手がうたれなければ、かれらが消滅するのを覚悟しなければならないだろう〔注13〕。それは野獣の研究に身をささげるすべての人にとって、またこの人類のいとこに好意をよせるすべての人びとにとって、限りない損失であろう。

霊長類とその研究について

伊谷純一郎

近代的な霊長類研究の歴史は、イギリスの生物学者、T．ハックスレーの「自然における人間の位置」（1863年）に始まったといってよい。かれは、ダーウィンが「種の起源」（1859年）で直接ふれなかった人類の起源の問題を、この書物のなかで最初に正面から取りあげたのであった。

ハックスレーは類人猿についての広範な記述から説きおこし、ついで、より下等なサル類や一般の哺乳（ほにゅう）動物、さらに化石人骨をもふくめた広範な資料をヒトの資料につき合わせて比較し、霊長目（もく）のなかにおけるヒトの進化の系脈をたどろうとしたのである。

近代の霊長類研究

ハックスレー以後100年の間に、西欧諸国においては、霊長類の分類学、比較形態学的な研究が盛んに行なわれたし、アメリカにおいては、心理学者R.M.ヤーキスらによって比較心理学、さらには神経生理学の研究が進められた。

自然状態における野生の霊長類の生態や、社会の実態を知る必要があるということを熱心に説いたのもヤーキスであった。1929年に、かれは2人の弟子をアフリカの野外調査に従事させている。

ついで、アメリカの霊長類学者、C.R.カーペンターが、パナマのバロ・コロラド島において、ホエザルの野外観察を行なったが、これが、野生霊長類についての最初の実りある研究であった。

しかし、霊長類の野外研究は、第2次世界大戦によって空白時代を迎えることになる。北アメリカとヨーロッパには、野生のサルは分布していないので、野外調査をしようと思えば、海外に足をのばさなければならない。ところが、日本の山野にはニホンザルが生息している。日本がまだ戦後の貧困と荒廃にあえいでいた1948年に、わたしたちはその調査を開始したのだった。

戦後急速に進んだ研究

欧米におけるこの研究の再開は、日本より約10年遅れた。しかし、それから今日までの約10年間には、世界の研究者によって、実に多くの野外調査がなされた。1940年当時には、わずか数種の野生霊長類の生態が知られているにすぎなかったが、今日ではそれが50種を越えている。さらに注目すべきは、この研究に人類学的な視点が強化されたことである。

亜　目	上　科	科	現生種（例）
真猿亜目	オマキザル上科	オマキザル科	ホエザル
			クモザル
		キヌザル科	コモンマーモセット
			ピグミーマーモセット
	オナガザル上科	オナガザル科	ニホンザル
			サバンナヒヒ
			シロクロコロブス
	ヒトニザル上科	オランウータン科	テナガザル
			オランウータン
			ゴリラ
			チンパンジー
		ヒト科	ヒト

この「世界動物百科」の霊長類編は、必ずしも近年の野外調査によるもっとも新しい諸発見が盛りこまれているわけではない。下の「注」は、主としてそういった面を補うことに利用した。

もう1つ、ここで断わっておかなければならないのは、この「3号」の巻頭に掲げられている『真猿亜目の分類表』についてである。

現在、霊長目の分類は、これが決定版だとして、世界の研究者の全員の支持を受けているものはない。くわえて、近年の化石霊長類についての多くの発見や、現存種についての研究が、従来の細分類主義とのあいだに、一種の混乱を引き起こしていることも事実である。

しかし、この表には、大きな問題点が2つある。その第1は、霊長目をヒト亜目、真猿亜目、原猿亜目に3分する点である。ヒトを真猿亜目からはずし、独立した亜目にしている分類は、他に類例を見ない。第2は、「8号」に出てくる原猿類の分類で、ツパイを霊長目からはずしている点。これは、今日なお議論の多いところだが、より古典的な立場だといってよい。

参考のために、日本の研究者の多くがよりどころにしている分類表を、このページの右上に掲げておく。アメリカのG.G.シンプソンの分類（1945年）を基礎とし、その後の研究成果に基づいて、修正が加えられたものである。■

カラーページ注

〔注1〕 **真猿亜目**　霊長目のなかの真猿亜目は、今から約4000万年前の、第三紀始新世のおわりから漸新世のはじめにかけて、下等な原猿類から進化したと考えられている。真猿亜目のなかの3つの大きな柱、ヒトニザル上科とオナガザル上科、およびオマキザル上科は、それぞれ異なった原猿類に由来し、独立に進化の道を歩んできたらしい。原猿類の起源はそれよりもさらに3000万年前の第三紀暁新世にさかのぼる。

〔注2〕 **霊長類の歯式**　哺乳類の歯式の原型は、門歯3／3、犬歯1／1、小臼歯4／4、大臼歯3／3、合計44本である。それに対して、霊長類の歯の最高は38本であるから、他の哺乳類にくらべて歯が退化していることがわかる。真猿亜目のなかで、狭鼻猿類はすべて2／2、1／1、2／2、3／3、広鼻猿類には2／2、1／1、3／3、2／2と2／2、1／1、3／3、3／3の2つの型がある。

〔注3〕 **人類の系譜**　最近の多くの霊長類の化石の発見は、しだいに霊長目のなかでの人類の系譜を明らかにしつつあり、人類は約2000万年前の第三紀中新世に、今日の大型類人猿と共通の先祖をもっていたらしい、という推定がされるようになってきている。

〔注4〕 **イルカの脳容量**　イルカの脳容量は約2000立方センチで、ヒトの約1400立方センチ、ゴリラの約500立方センチ、チンパンジーの約400立方センチとくらべるとはるかに大きく、また複雑な構造をもっている。イルカの脳の機能については、多くの研究者が注目しているが、音や超音波を発してその反響を感知し、物体のある方向や、その大きさや、そこまでの距離などを正確に判断する能力をもっているという。

〔注5〕 **手の発達**　今日では、直立二足歩行こそが人類進化のかぎであると考えられているが、それがどのようにして起こったかは明らかにされていない。しかし、霊長類はその進化の過程において早くから体軸を垂直にしてすわることができ、これによって前肢を自由にし、手を歩行以外に用いることを発達させていった。このように、手を道具として用いることと、脳の発達とのあいだには、深い関係があると考えられている。

〔注6〕 **マウンテンゴリラの巣**　ウガンダ西南部における、京大の河合雅雄博士らの調査によれば、樹上につくられたもの57パーセント、地上は43パーセントとなっている。また、多くは巣の外に糞便をするが、巣の中に残すこともある。

〔注7〕 **サルの分布**　第三紀暁新世から始新世にかけては、北アメリカやヨーロッパにもたくさんの霊長類が分布していた。中新世から第四紀洪積世にかけても、多くの真猿類がヨーロッパに分布していたことが、化石によって明らかにされている。古今を問わず、サルがまったく分布しなかったのは、ユーラシア大陸の北部と、オーストラリアおよびニュージーランド、ニューギニアである。

〔注8〕 **サバンナヒヒの群れの分裂**　今日では、その生態や社会の構造は、野外調査によって詳しく知られるにいたった。雄の支配、雌の貞節などは、必ずしも本文のとおりではなく、はるかに多様な様相をもつ。また、群れの分裂の動機や経過なども、より複雑で多様である。

〔注9〕 **サルの音声**　音声は種によって異なる。野生のニホンザルでいえば、30数種の音声が分類され、個々の社会的な意味が明らかにされている。多くは、個体間の社会的調整、群れの統合などに役だっているが、社会的調整に役だつもののなかで、生得的な音声でありながら、より表現的であり言語的な機能をもつものが若干認められている。

〔注10〕 **野生ゴリラの体格**　飼育されたもののほうが、野生よりも一般に小さいと考えられる。アメリカのG.シャラーによれば、今日までに記録された野生マウンテンゴリラの最大は、体重218キロ、身長2.057メートルであった。

〔注11〕 **ゴリラの性的成熟**　今日までに明らかにされたところでは、本文にある年数よりも雌雄ともに数年ずつ早い。

〔注12〕 **ゴリラの分布**　マウンテンゴリラはコンゴ東部、ルアンダ北部、ウガンダ西南部の山地林中にすみ、ローランドゴリラよりからだはひとまわり大きく、体色はまっ黒で、おとなの雄の背中から腰にかけては銀白色となる。雄が頭頂にヘルメット状の高い頭頂隆起をもつのもこの亜種の特徴である。ローランドゴリラはカメルーンを中心に、リオムニ、ガボン、コンゴ（ブラザビル）、ウバンギシャリ西部、ナイジェリア東部の低地熱帯降雨林中にすみ、体色は黒かっ色で、マウンテンゴリラよりもやや小さい。

〔注13〕 **ゴリラの生息地**　コンゴとルアンダおよびウガンダの国境のビルンガ火山群は、マウンテンゴリラの保護地として有名であった。その東端のムハブラ・ムガヒンガ山では、1958～1960年に日本の調査隊が調査を行ない、西端のミケノ、カリシンビ両山では、アメリカのシャラーが、1959～1960年にかけて調査した。シャラーが調査を行なった地域は、コンゴ独立以前は長年にわたって、ベルギーの厳重な保護下にあり、約200頭ものマウンテンゴリラが生息し、それを研究の対象にしたのである。しかし、コンゴ独立後、この保護地域は原住民に荒らされ、現在1頭のゴリラも残っていないと伝えられる。■（伊谷純一郎）

野生動物こんにちは 1

ジャングルに ゴリラを追って

日本テレビ制作の「すばらしい世界旅行」自然シリーズが，野生動物の生態を追っていく意欲的なドキュメントとして，注目を集めている。ここではブラウン管に現われない，野生動物と取材班とのさまざまな出会いを中心に，取材の裏表をたどってみたい。

〝ゴリラが近くにいるらしい〟という情報がはいったのは，わたしたちが赤道アフリカ奥地の部落へ取材基地を設けてから43日めのことだった。こんどの取材が，そんなに簡単にいくはずがないということはじゅうぶん承知していても，時間が経過していくなかで，わたしたちは若干いらだっていた。だからこの新しい情報に，とびあがらんばかりに喜び，さっそく追跡行を開始した。

ゴリラ生けどりのようすをカメラにおさめようと，わたしたちが取材基地を設けたのはカメルーンの首都ヤウンデからおよそ400キロ，ガボンとの国境に近いビクラ村であった。日本と同じように南北に細長いカメルーンは，場所によってかなり気候が違うが，このあたりは海抜が1000メートル近くあるので，赤道直下のわりには涼しい。わたしたちが現地入りした4月は，ちょうど小雨季にあたり，ほとんど毎日のように何時間か雨が降ったが，そんなときは，セーターでも着こまないと寒いくらいだった。わざわざ撮影にこの時期を選んだのは，ゴリラ狩りの〝猟期〟だと聞いたからだ。小雨季になると，ゴリラたちが比較的部落に近いところまでやってくるし，猟師たちも雨音にまぎれてゴリラに接近できるのだという。

わたしたちの撮影に協力してくれたのは，30歳の猟師モネンチャン・プロスペールとその仲間たちであった。モネンチャンの父親はカメルーンでも指おりの猟師だったが，かれもその感化を受けて，17歳の時から猟にでるようになった。最初はゲノン（サルの一種）やダイカー（カモシカの一種）を追いかけていたが，19歳の時からゴリラ狩りを行なうようになった。最初の猟で4頭いっぺんにしとめ，以来11年間におよそ300頭のゴリラをしとめたという。ゴリラ狩りができる猟師はいたって少ない。このビクラ村周辺でも，かれと相棒のラテ・マロだけだ。〝この仕事は度胸のあるやつしかできないからな〟と猟師たちは胸を張った。

麻酔銃で生けどる

2年ほど前からモネンチャンは，ゴリラ狩りに麻酔銃を使うようになった。眠り薬を撃ちこんで生けどるやり方である。それまでは親ゴリラを撃ち殺し，その子どもを生けどるというのが，かれらのやり方だった。なんとか親子いっしょに生けどって，動物商に売りつけたいという〝商魂〟が麻酔銃の使用に結びついたらしい。

わたしたちはしだいに，ジャングルの奥深く進んでいった。モネンチャンが麻酔銃をもち，仲間の猟師3人が万一にそなえてライフル銃をもつ。そのあとにわたしたちスタッフ3人とポーター5人。合計12人のキャラバンである。

麻酔銃の一撃で，グッタリと横たわった母ゴリラのそばに，チョコンとすわった子どもゴリラ



ゴリラには，ふたつの亜種が知られている。カメルーン地方にすむローランドゴリラ（低地ゴリラ）とコンゴ，ウガンダ国境の山岳地帯にすむマウンテンゴリラ（山ゴリラ）で，ともに生息地は深いジャングルにつつまれている。生息数は，マウンテンゴリラのほうが圧倒的に少なく，コンゴ，ウガンダ両国政府が厳重な保護政策をとっているので，世界じゅうの動物園に飼われているゴリラは，そのほとんどが，カメルーン産のローランドゴリラである。そのローランドゴリラとて，生息数がそんなに多いはずはなく，かなり以前から関係者の間では絶滅の危機が叫ばれているが，現地の狩猟の実態は意外に紹介されていない。それはたぶん，ゴリラのすむジャングルという環境が，映画や写真の撮影に多くの困難をもたらすからだろう。

正直いって，今回のわたしたちの取材も，成算じゅうぶんとはいいきれなかった。リスクがかなり大きいことは事実だった。しかし，こうやって実際にジャングルを歩き始めてみると，なんとなく〝撮影できるのではないか〟という気がしてくるから不思議なものだ。難行苦行を繰り返しながら，ジャングルを進むうちに，真新しいゴリラの巣が見つかった。猟師たちは，この巣の状態を見てゴリラとの距離を知る。ゴリラは毎日新しい巣をつくるので，材料の枝や葉が湿っていればまだ近くにいることになる。

現われた子連れの大ゴリラ

猟師たちの目つきが急に鋭くなった。わたしたちも緊張した。カメラマンとアシスタントが，それぞれ1台ずつカメラを持ち，わたしはデンスケ（テープレコーダー）を持って待機した。

突然，猟犬たちの激しいほえ声が聞こえ始めた。ジャングルは見通しが悪いので，猟師たちはイヌの力を最大限に利用する。イヌたちはゴリラの不意を襲い，群れがバラバラになったところで，ねらったゴリラを追いたてていく。ほえ声は包囲を始めたという合図だった。猟師とわたしたちは懸命にイヌのほえ声のするほうへ駆けつける。ゴリラ狩りは，アッという間にクライマックスを迎えた。

ジャングルがちょっと開けたところへ出た。前方100メートルほどのところに，はっきりとゴリラの後ろ姿が認められた。カメルーン到着以来2か月めにしてはじめて見るゴリラの姿だ。カメラマンは走りながら懸命にカメラを回す。ゴリラはすぐに茂みのなかへ飛び込み，そのあとをイヌたちが追う。しきりにゴリラの咆哮（ほうこう）が聞こえる。イヌたちもほえつづける。デンスケも回しっぱなしだ。麻酔銃は弾（たま）が重く20メートルくらいまで接近して撃たないと命中しにくい。猟師たちはさらにゴリラに近づいていく。



ジャングルを踏みわけて進む猟師と猟犬たち

茂みを越えると，ゴリラとの距離ががぜん縮まった。すかさず麻酔銃が発射される。ゴリラは想像したより大きく，1発撃っただけでは薬がききめをあらわしそうにない。猟師たちはつづけて2発めを撃とうとあせる。だが，ゴリラの激しい野性は，猟師たちを容易には近寄らせない。ゴリラはふたたび深い茂みのなかへ姿を隠した。

猟師たちは注意深くあたりをうかがいながら，茂みへ近づいていく。負傷したイヌが悲鳴をあげて飛びだしてくるので，すぐ近くにいることはまちがいないらしい。わたしたちスタッフは，息をはずませながら，ことのなりゆきを見守った。と，そのとき，まさにそのとき，大ゴリラがけたたましい咆哮とともになんとカメラマンの前に姿を現わした。まっかな口をあけて，わたしたちのほうへ突進してきたのである。一瞬のことで，みんなどうすることもできない。だがこのとき思いがけないことが起こった。カメラマンが，どうしたはずみか足をすべらし，持っていたカメラをふりあげるような形になった。するとどうだろう，突進してきたゴリラは，わたしたちの3メートルく

動物パズル



Aライオンのしっぽは？



Bミミズクのあしは？

ここにいる４種の動物はからだの一部が隠れているか，完全に描かれていません。各図の①から⑤までの中からそれぞれの正しい部分を選んでください。（答えは，このページの下にあります。）



Cモンシロチョウのはねは？



Dシカのつのは？

え・牧野四子吉

らい手前で急に方向転換し，あわててわきの木に登りだしたのである。カメラマンの動作がゴリラには威嚇と映ったらしい。この間，時間にすればほんの数秒間だが，わたしには実に長く感じられた。

一瞬茫然となっていた猟師たちが，すぐに木の下へ集まってきた。地上10メートルぐらいの木の上にいるゴリラ目がけて，２発めの麻酔銃が発射された。こうなると，あとはもうゴリラが眠りだすのを待つだけである。

そのうちに猟師たちは目ざとく，子どもゴリラを見つけだした。すっかり怯えきった子どもゴリラは，たやすく猟師たちにつかまえられてしまった。ほどなく，親の大ゴリラも麻酔がきいて意識が朦朧となり，高い木の上からころげ落ちた。２発めの弾を発射してから15分後だった。ゴリラは大きないびきをかいて眠りだした。

グッタリと横たわった母親ゴリラのわきに，チョコンとすわった子どもゴリラ。狩りの興奮からさめたわたしには，その子どもゴリラの姿が，なんとも哀れに感じられてしかたがなかった。■

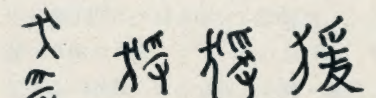
（日本テレビ・ディレクター・菊池浩佑）

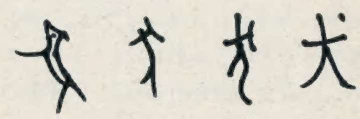
動物パズル　答え

A　①ウシ　②ブタ　③キツネ　④ライオン　⑤クモザル
B　①ヒバリ　②タカ　③キジ　④ミミズク　⑤カモ
C　①ヤマキチョウ　②モンシロチョウ　③ツマベニチョウ　④キアゲハ　⑤ヒオドシチョウ
D　①アイベックス　②スイギュウ　③ヒツジ　④ウシ　⑤シカ

漢字のふるさと 1

藤堂明保





猨（えん）　テナガザルのことだが，のちサルの総称となった。猿は俗字で，もとは猨と書いた。爰という字は，上に爪（手の形），下に又（手の形）を描き，その間に棒をはさんで，引っぱっている姿である。たとえば，子どもが川におぼれて，中流でアップアップしている。そこで棒を差しだしてつかまらせ，ぐいと引き寄せる。それが援助の援である。だから爰とは援の原字だと考えてよい。

してみると，テナガザルを猨と呼ぶのは，長い腕をのばして木の枝を引き寄せ，巧みに木登りをするからだろう。「爾雅」という古字書に「よく援するものを猨という」と解説しているのが正しい。長い腕をのばすのを「猿臂をのばして」と，形容をするのは，テナガザルの姿を思い浮かべた言い方である。なお「けものへん」は，動物の代表として犬の走っている姿をかたどったもの。■

田中光常

動物写真のポイント

3. 動き

レンズで合わせるよりからだを動かせ



2匹の子イヌ
35ミリカメラ
レンズ 100ミリ
フイルム SSS
F5.6・1/60
写真電球2燈

動物はむずかしいとよくいわれる。たしかにかわいいけれど，あちこちに動きまわり，少しもじっとしていない。静かにしていればいるで，おもしろさがなくなってしまう。動物であるからには，どうしても動きのあるところをねらいたい。そのときピントを合わせるのに，レンズのくり出しノブを回して，目とか鼻先にカチッときたところを捜すわけだが，相手が動くので後ピンになったり，前ピンになったり，ええいめんどうくさいということになってしまう。そこでだいたいの構図が決まったら，あとはピントだけであるから，1か所に合わせたならばその後は動物の動きにつれて，カメラを持った手，頭，からだ，全部を前後させて，いつでも動物とカメラの間隔を一定にしておくようにすることである。この方法は，ペットや家畜，動物園でいろいろの動物のクローズアップをとるときなどにたいへん便利で，失敗の少ない方法である。■

ペット相談室



担当
杉浦 宏
（上野動物園水族館飼育係長）

〈問〉 わたしは今までにキンギョやメダカは飼ったことがありますが，最近色の美しい熱帯魚を見て飼ってみようと思っています。熱帯魚の飼育はむずかしいものでしょうか。（東京都・鈴木常子）

〈答〉 ひと言でお答えするならば，だれもが熱帯魚を飼うことができます。とくにあなたのように，キンギョやメダカを飼った経験がおありならば，なおよいでしょう。

熱帯魚はその名のとおり，東南アジア，アフリカ，南アメリカなどの熱帯地方の淡水域にすむ魚なので，日本のように水温が下がってしまっては，生きていられません。一般には25°C前後の水温を保ってやらねばなりませんが，種類によっては，30°C近い水温を必要とするものもあります。

夏の間は保温の必要はほとんどありませんが，秋から翌年の初夏ぐらいまでは市販のヒーターを使ってあたためてやります。温度を調節するサーモスタットのついたものを選ばねばなりませんが，水槽の水を循環ろ過したり，エアポンプで空気を送りこむ装置は，必ずしも必要ではありません。これは水の量に対して魚の数が多すぎた場合に必要なので，魚の数と水量や水草がうまくバランスのとれているときはいりません。

たくさんの熱帯魚のなかには，飼いにくい魚もいます。そこで，はじめてお飼いになるかたは，胎生メダカ科の魚がよいでしょう。グッピー，プラティー・ソードテールなどはじょうぶなうえに繁殖も簡単です。■

〈問〉 水槽の中に植えてある水草は，ほんとに役にたつものなのでしょうか。（東京都・木村美知子）

〈答〉 熱帯魚やキンギョを飼うための水槽には，必ず水草が植えてあります。

多くのかたが，水草をむぞうさに水槽の中に入れているようですが，魚をじょうぶに育てるのに，水草はたいへん役にたっていることを忘れないでください。

水草は光があたると同化作用を営み，水中の炭酸ガスを吸収し，酸素を放出します。魚の呼吸作用はこの逆で，酸素を吸って炭酸ガスを出します。ですから，魚に必要な酸素を水草が供給しているわけです。

次に，魚を飼育すれば当然えさを与えなければなりません。えさを食べた魚は，排泄物を水中に出します。もしも排泄物が水中にそのまま蓄積されると，魚はその水では生きていけなくなります。

この排泄物，すなわち窒素化合物を水草は栄養として吸収し，分解して，魚に害のない無機物に変えてしまうのです。

この2つのことだけでも，水草が果たしている役割のたいせつなことがおわかりでしょう。

そのうえ，水草は魚が生きていくよい隠れ場ともなりますし，産卵場や，小さな魚の生活の場所ともなるのです。

美しい熱帯魚やキンギョが，水草の植えてある水槽の中を泳ぐ姿をながめるのは，楽しいことです。■

仲間のひろば

問 貴社が提携した，フランスのラルース社とは，どんな会社で，またどんな本を出版しているのですか。説明して下さい。（東京都・竹下喜久夫）

答 ラルース社は，1852年，ピエール・ラルース氏によって創立された出版社です。今では，フランスでは，「字引きをひく」というかわりに，「ラルースをひく」とまで言われるほど，〝辞書のラルース〟として有名になりました。

代表的な「ラルース大百科事典」をはじめ，「フランス国語辞典」，医学，科学，実用，学習などの，各種の辞・事典類を出版していますが，とくに「プチ・ラルース・イリュストレ」（図解小事典）は，日本にもなじみの深いものです。

辞・事典のほかにも，教科書，参考書，美術書，年鑑，文学書など，広い出版活動を続けており，フランスばかりでなく，世界的にも知られた名門出版社です。本社はパリ，モンパルナス通り，他に印刷・製本工場などが，郊外にあります。■

問 「世界動物百科」のフランス・ラルース版の原名を教えてください。（神戸市・内山 隆）

答 「decouvrir les animaux」です。直訳すれば，「動物の発見」となりますが，日本的にいえば，「動物を再発見する」と言ったほうがわかりやすいでしょう。わたしたちが地球上にいっしょにすんでいる動物たちを，新しく〝わたしたちの友だち……すなわち仲間〟としてとらえ，喜びや悲しみをともにしながら，仲良く生きていく——という意味がこめられています。■

原稿募集

読者の研究——動物の採集，分布，飼育，観察などの研究報告。
仲間のひろば——本誌への要望，動物界への意見，主張。また自然保護に関する各地の現況，対策など。
動物ニュース——学会，同好会，動物施設，保護，飼育などに関する珍しいニュース。
ペット相談室——ペットの飼育法，病気，購入などに関する質問。
動物写真——あなたが撮影したもの，または秘蔵の動物写真。

原稿の枚数は，いずれも原則として400字詰原稿用紙2枚以内（編集部で短くすることもあります）

原稿には必ず住所，氏名，年齢，職業，電話番号をお書きください。また，できるだけ写真を添付してください。

採用分には薄謝または記念品を進呈いたします。なお，お送りくださった原稿，写真はいっさいお返しいたしません。採否のお問い合わせにもお答えいたしかねますのでご了承ください。

送り先は，
東京都千代田区有楽町2—3（〒100）
朝日新聞東京本社
「世界動物百科」編集部
『私たちの仲間』係

裏表紙説明

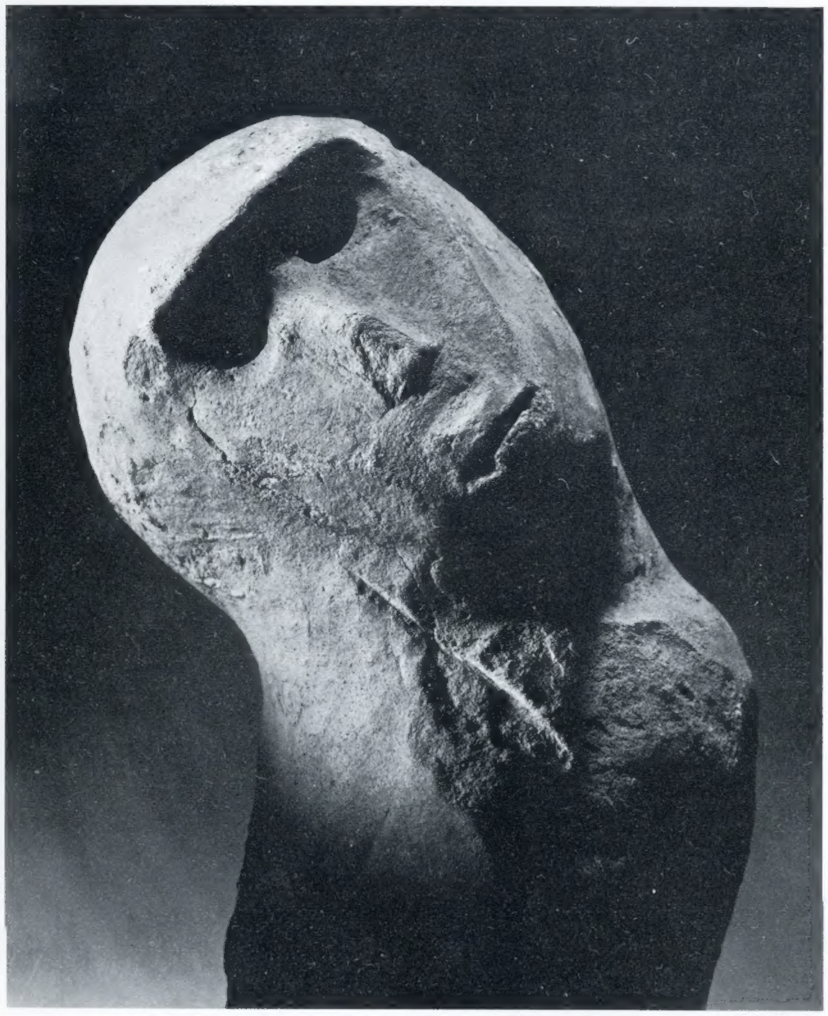
ボクサーは，ヨーロッパでいまいちばん飼われているイヌである。それは，その性格がよく，しかも勇猛だからである。とくにこのイヌの目はいかにも善良で，利口そうだ。

ボクサーは，昔中央ヨーロッパで，クマやイノシシを狩るのに使われていた。現代のボクサーも，昔の，力と勇ましさと，猟犬としての誇りをもちつづけている。主人にはよくなつき，おとなしく，たけだけしい外観にもかかわらず，子どもをあずけても安心である。もし，ボクサーといっしょにいて，なにか事故が起こったとしたら，イヌを責めるまえに，よく事情を調べてみる必要がある，といってよい。■

PH. CAMERA CLIX

埴　輪

猿　茨城県玉造町出土　高さ27.3センチ　　東京国立博物館蔵　　　撮影　坂本万七





犬　群馬県境町出土　高さ52.5センチ　　嵯峨氏蔵　　　撮影　坂本万七

埴輪の起源は，古墳の土留説や殉死の身替り説などいろいろ説かれてきたが，最近の研究では，墓に供える種々の器を模して，土中に立てるために円筒をつけた円筒埴輪が，その始まりであるとされるようになった。ついで，家・楯・鞆・蓋などの器財埴輪が，死者の生前のいさおしをたたえるために作られ，墳丘に立て並べられた。古墳中期になると人物や動物の埴輪が生まれ，後期には剣や翳なども加わって種類が増した。東北から九州まで，広範囲にわたって出土するこれらの埴輪は，古代日本人のすなおで清らかな造型感覚を伝えて，深い愛着を覚えさせる。動物を象った埴輪には，馬・犬・猪・鶏などがあるが，猿は今のところこれ１点しか発見されていない。背中に子猿を背負っていたらしい痕があり，見る角度によっては失われた子猿を想うような悲しげな表情にも感じられて興味がつきない。犬のほうは何かの気配に耳を立ててふり向いた姿である。

愛らしく，また賢そうな犬の特色が，単純な造型のなかにみごとにとらえられている。こうした動物埴輪は，死者の生活に仕えさせる意味で作られたと考えられるが，どれを見ても巧まぬ技で生き生きとした表現に成功している。それは，幾人かの名人の作というようなものではなく，土師の工人たちの敬虔で無私な製作が，すべてにそなわらしめた美しさだったのだ。■　　　（水尾比呂志）

世界動物百科　通巻3号　昭和46年3月28日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



雑誌コード　0634